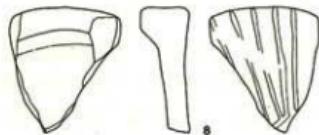
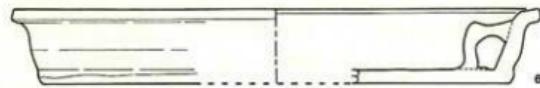
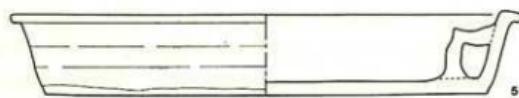


0 10cm



0 20cm

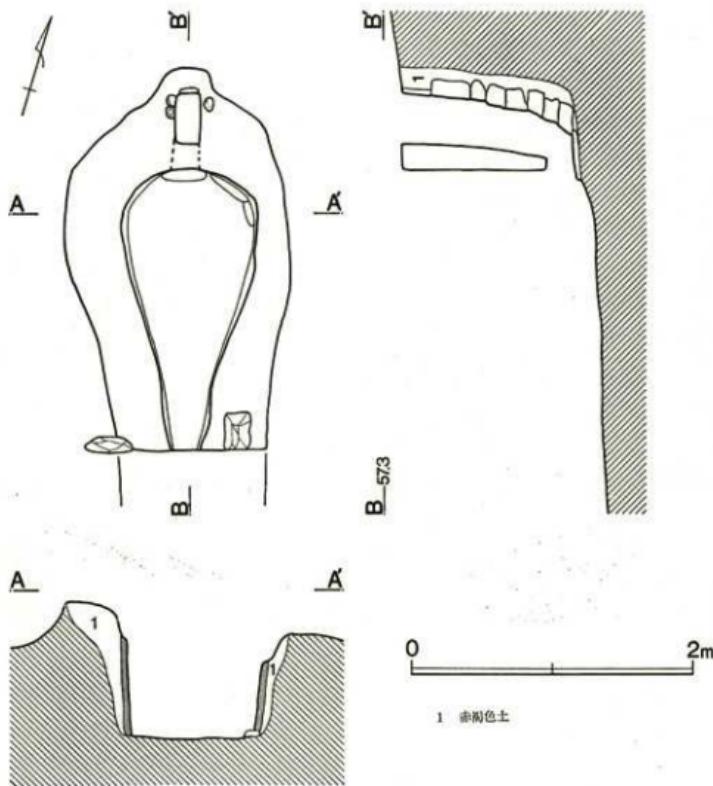
第125図 埋設遺構出土遺物

が重なって溝目が残り、8は推定径20.9cm、9は17.7cmと考えられる。溝断面は丸味をもつV字形で、9の上白回転方向は左回転である。石材は粗粒砂岩。

#### g 炭窯（第126図、図版27）

第5号墳の南側埴丘を利用して構築されていた。窯体下部を欠失し、前庭部・焚口部の施設は検出されなかった。現存長2.7mを測り、傾斜角度は6°である。最大幅1.48m、最小幅0.34mと基部側が極端に細くなる水滴状の窯体である。壁面には粘土が貼られ、高温のためにガラス化している床の一部には、緑泥片岩が貼られている。煙道は、底面に緑泥片岩を置き、その上に第5号墳の石室の石と思われる模灰岩切石を組み上げて築かれている。煙出しは四角にあけられている。

（今井 宏・酒井和子）



第126図 炭窯

## IV 寺ノ台遺跡

### 1 遺跡の概観

寺ノ台遺跡は、滑川村の南部丘陵間を東流する市の川左岸の、南西方向へ伸びる一小丘陵の尾根部に立地している。屋田遺跡から北方へ約1km離れ、市の川を挟み相対した状態にある。標高は71~73m、現水田面との比高差は27mを測る。遺跡が展開する尾根部の東及び西側には、丘陵を画する深い開析谷が市の川に向って存在している。

基本層序は次のとおりである。

1層 茶褐色土（表土）

2層 明褐色土

砂質が強くサラサラしている。

3層 褐色土

弱い粘性をもち、しまっている。

4層 黄褐色土

少量の凝灰岩細粒を含み、粘性が強くしまっている。

5層 暗褐色土

多量の凝灰岩粒を含み、粘性が強く堅くしまっている。

第127図は、調査区中央のD-3グリッドの層序である。斜面部へ移行するにつれ、2・3層の層厚が増している。遺構確認面は、3層褐色土である。調査開始時の地目は、一部栗畠を含む雜木林で、表面観察も不可能であった。

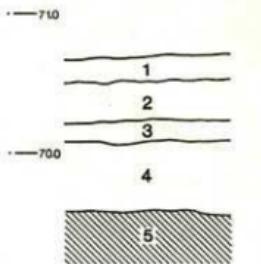
調査の結果、検出した遺構は次のとおりである。

古墳時代後期の住居跡3軒、古墳1基

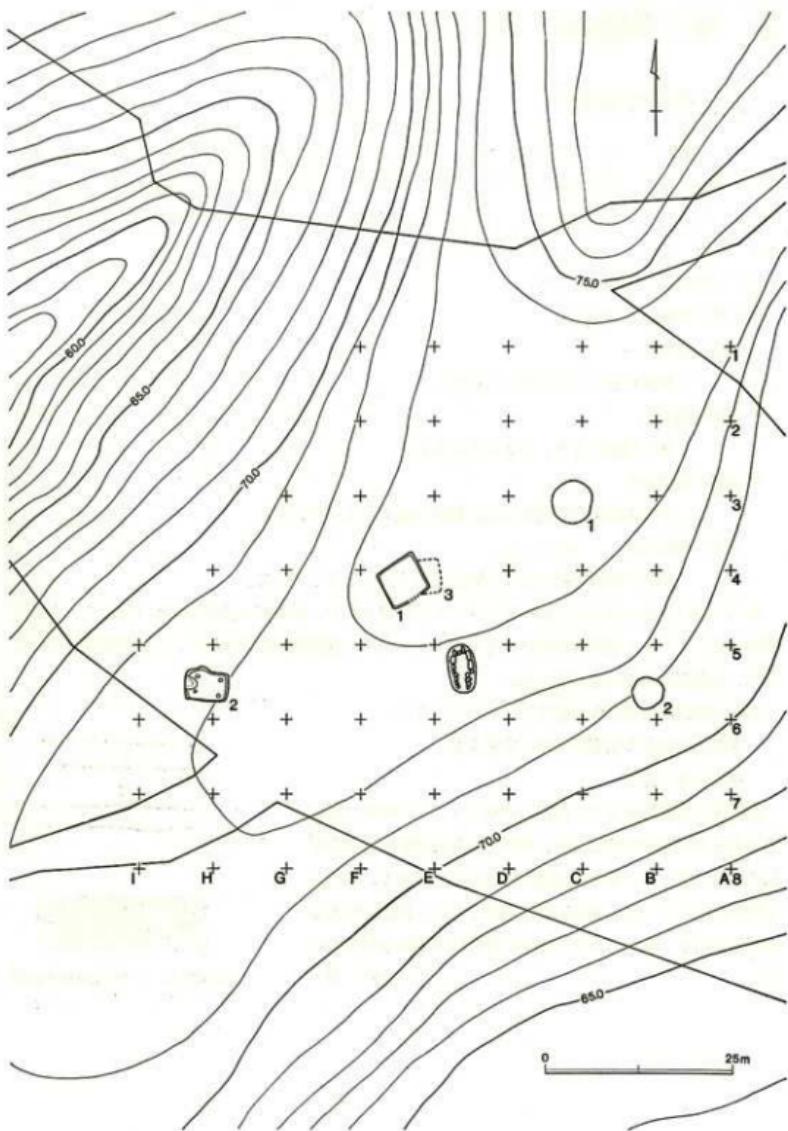
中世の塚2基

住居跡は調査区中央で、重複した第1・2号住居跡、西端から第3号住居跡が検出され、第1・3号住居跡は擾乱等で保存状態は悪いが、第2号住居跡は保存状態も良く、良好な遺物が出土している。古墳は終末期のもので、調査区中央の緩斜面に検出された。塚は中央平坦面と緩斜面に存在している。

(今井 宏)



第127図 寺ノ台遺跡標準土層



第128図 寺ノ台遺跡全測図

## 2 遺構と出土遺物

### (1) 古墳時代の遺構と出土遺物

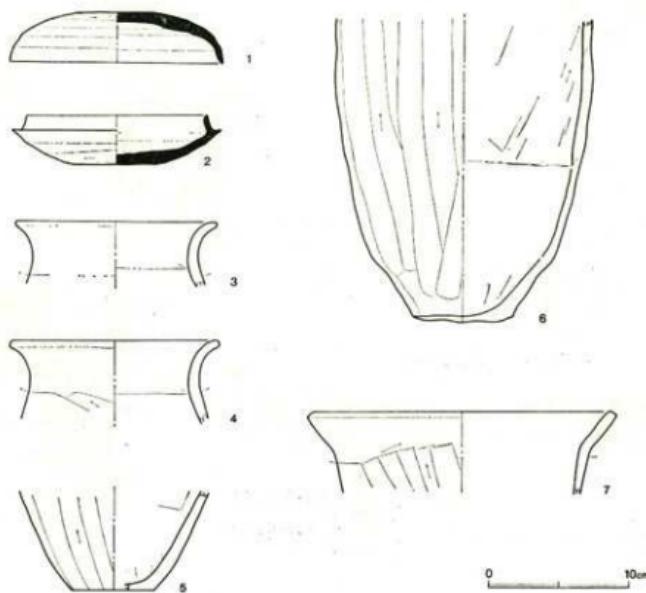
寺ノ台遺跡は、東西两侧を深い開析谷に挟まれた南西方向へ伸びる丘陵尾根に立地している。

調査は、遺跡の東端部が対象となり、古墳時代後期鬼高期の住居跡3軒と終末期の古墳1基が検出された。

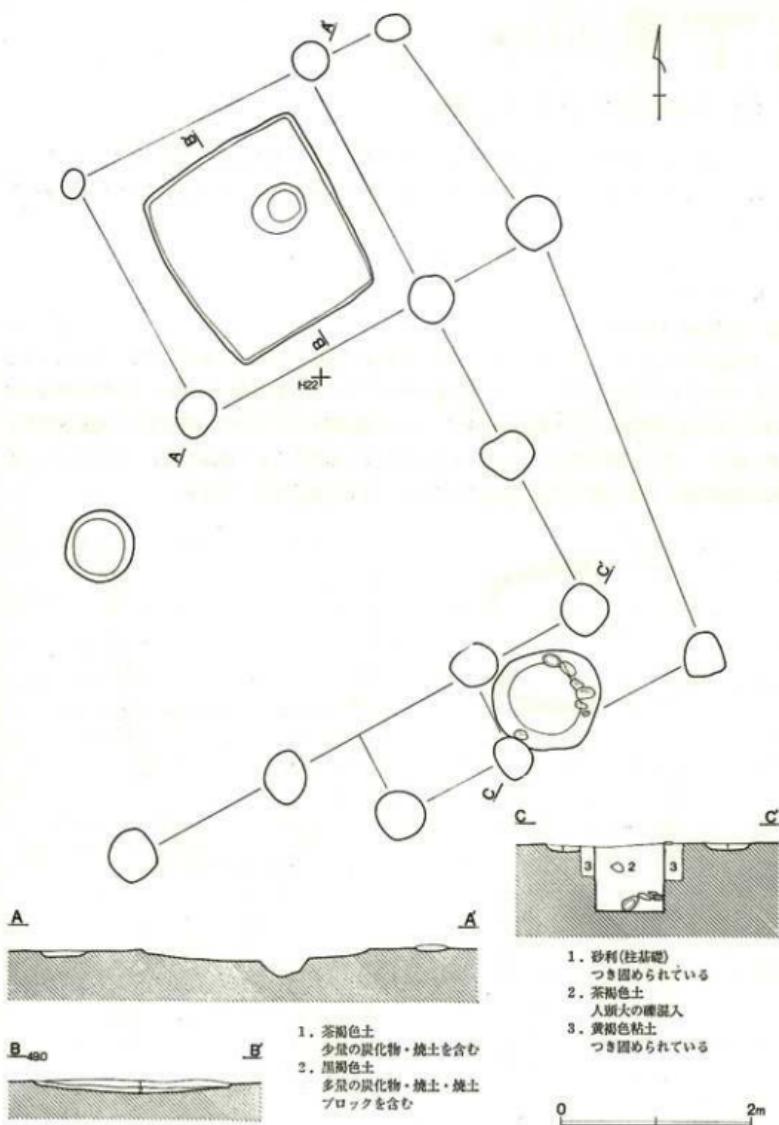
#### a 住居跡

##### 第1号住居跡（第130図）

調査区中央のE-3・4グリッドに位置し、同時期の第3号住居跡と重複して検出された。5.2×5.4mの正方形を呈し、N-65°-Eを主軸方向としている。確認面から床面までの深さは10~18cmで、東壁及び南壁の一部が攪乱を受けており、壁は緩く立ち上がる。床面は、ほぼ水平であるが、軟弱で一部に岩盤も露出している。柱穴、カマド、貯藏穴などの施設は検出し得なかった。遺物は須恵器蓋・坏身・甕などが出土しているが、いずれも覆土中からである。



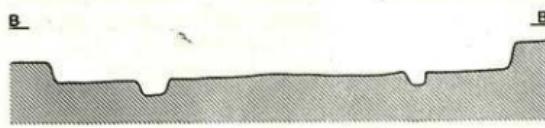
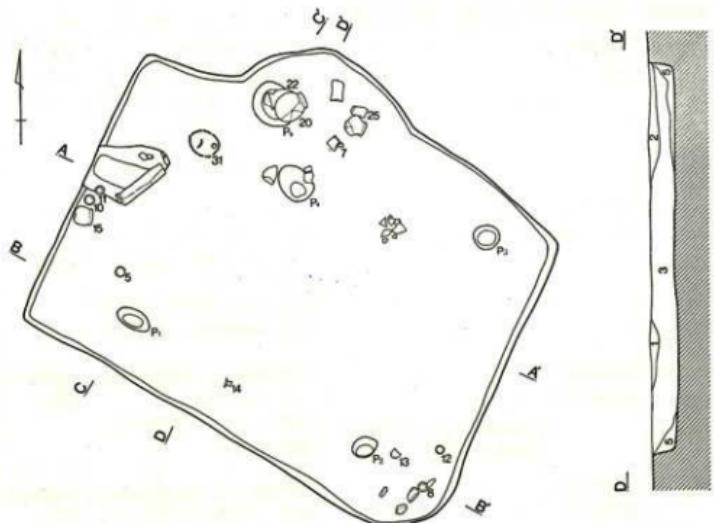
第129図 第1号住居跡出土遺物



第130図 第1・3号住居跡

第1号住居跡出土遺物（第129図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋 壺 蓋	1	口径(15.4) 器高 3.6		ロクロ右回転成形。 天井部右回転笠削り(4回転)。 内面回転ナデ整形、天井中央部 一方向のナデ整形。 灰白色。長石、黒色粒、白色微 粒子等の散砂粒含む。焼成良好。	全体の40% 残存。 須恵器
蓋 壺 身	2	口径(13.1) 器高 3.5		ロクロ右回転成形。 底部右回転笠削り(5回転)。 内面回転ナデ整形、底面中央一 方向のナデ整形。 灰色。長石、黒色粒、白色微 粒子等の散砂粒含む。焼成良好。	全体の50% 残存。 須恵器
甕	3	口径(14.6) 現存高 4.5	口縁部は外反し、口唇部は丸 味をも外側をむく。	口縁部横ナデ。内面頸部木口状 工具によるナデ。 橙褐色。A~E+細砂粒多量。 焼成やや甘い。	口縁部20% 現存。
甕	4	口径(15.2) 現存高 5.6		口縁部横ナデ。外面胴部斜位の 笠削り、内面木口状工具による ナデ。 橙褐色。A~E+粗砂粒多量。 焼成やや甘い。	口縁部40% 現存。
甕	5			外面胴部下から上への縱笠削り、 底面は不定方向笠削り。内面は 木口状工具によるナデ。 淡橙褐色。A~E+粗砂粒。燒 成良好。	底部40%現 存。
甕	6	底径 7.2 現存高 21.5	底面削りが粗く不安定。	外面胴部下から上への縱笠削り、 底面横位の笠削り。内面の細 かい木口状工具によるナデ。 茶褐色。A~E+細砂粒やや多 く含む。焼成良好。	胴中位から 底部60%現 存。
瓶	7	口径(22.2) 現存高 5.9	口縁部は僅かに内凹しつつ外傾 し口唇部は平坦に仕上げる。	口縁部横ナデ。外面胴部下から 上への笠削り。内面ナデか。 淡茶褐色。A~F+細砂粒。燒 成甘い。	口縁部30% 現存。



1. 黒色土  
弱い粘性をもつ
2. 黄褐色土  
強い粘性をもち、硬い
3. 黑褐色土  
少量の赤褐色土混入、微量の炭化物を含む
4. 濃茶褐色土  
少量の黒色土混入
5. 茶褐色土  
少量のローム混入、硬い
6. 茶褐色土  
少量の燒土・炭化物を含む
7. 赤褐色土  
多量の燒土・炭化物を含む
8. 燃土  
焼けしまっている
9. 赤褐色土  
少量の燒土・炭化物・灰を含む

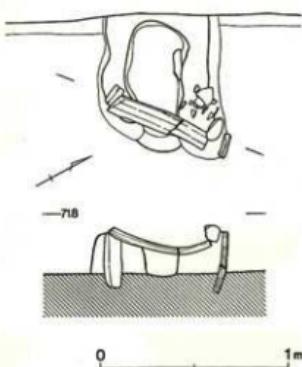
0 2m

第131図 第2号住居跡

## 第2号住居跡（第131・132図、図版54）

G・H-5グリッドに位置している。調査区の西側に存在する深い開折谷を臨み、住居跡群では最も低位な標高72mの地点から検出されている。5.1×3.75m、南コーナーが隅丸状であるが、ほぼ長方形を呈する住居跡である。主軸方向は、N-67°-Wである。確認面より床面までの深さは15~20cm、傾斜に沿って南側が僅かに低くなっている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁の中央部には、幅1.9m、奥行0.6mほどの張り出し部が設けられている。覆土は、微量の炭化物を含む黒褐色土を主体に、濃茶褐色土、茶褐色土が堆積し、いずれも堅くしまった土層であった。床面は凹凸もなく、ほぼ水平で堅く踏みしめられていた。張り出し部の床面も同じレベルであるが、やや軟弱であった。柱穴は対角線上から僅かにはずれ、P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>の4本の主柱穴が検出された。P<sub>1</sub>20cm、P<sub>2</sub>16cm、P<sub>3</sub>18cm、P<sub>4</sub>16cmと比較的浅いものである。P<sub>4</sub>と張り出し部間に、径45cm、深さ26cmの円形を呈する貯蔵穴が存在している。

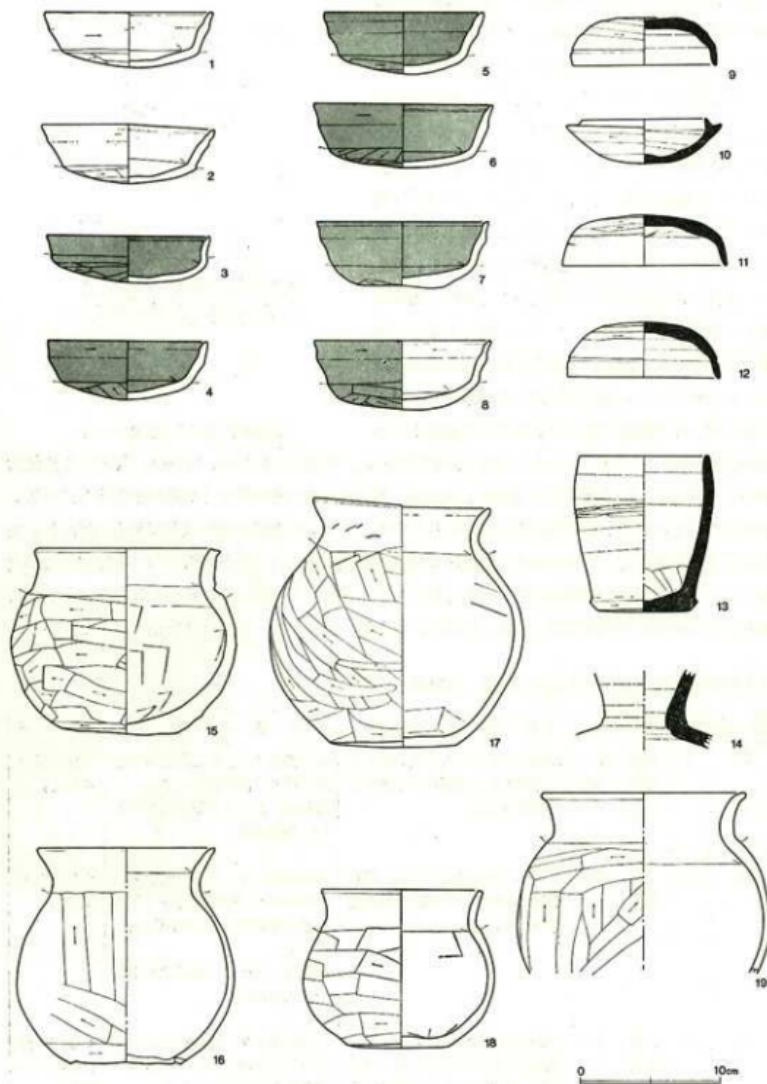
両袖型に属するカマドが西壁中央に構築されている。カマドは粘性の強い濃茶褐色土で築かれ、右袖が板状の緑泥片岩、左袖が偏平な自然砾が補強材に埋め込まれていた。天井部にも緑泥片岩が渡されている。焚口及び燃焼部は平坦で良く焼けてしまっているが、煙道部は検出できなかった。遺物はカマド左袖脇から須恵器蓋・坏身・貯蔵穴内より甕、南コーナーより須恵器蓋が出土している。



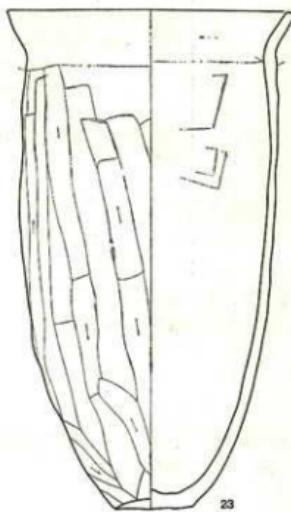
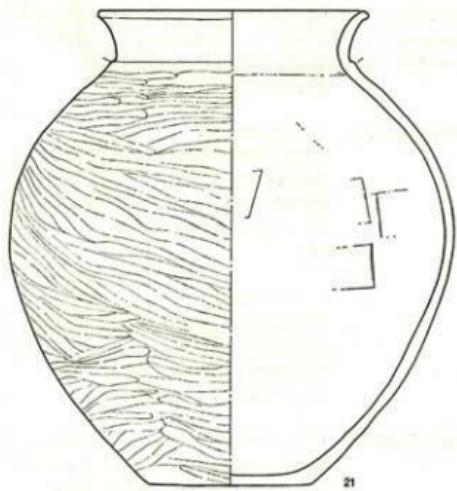
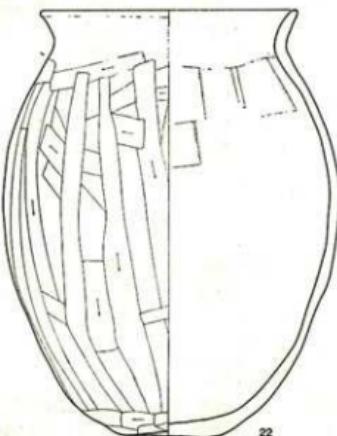
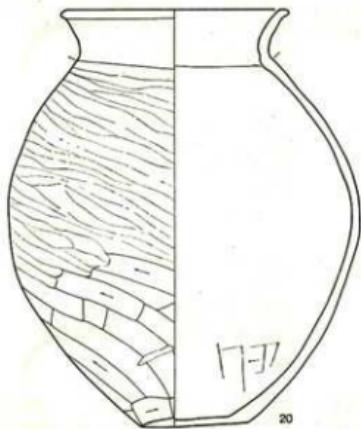
第132図 第2号住居跡カマド

## 第2号住居跡出土遺物（第133~136図、図版57~59）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
坏	1	口径 12.2 器高 4.0	口縁は中位やや上に鈍い段をもち外傾する。内面口縁上端に浅い沈線が巡る。	口縁部横ナデ。外面体部横・縱位の範削り。内面横位ナデ。橙褐色。A~E+細砂粒やや多い。焼成良好。	口縁を僅かに欠く。
坏	2	口径 12.6 器高 4.3	口縁96%の位置に段をもち、外傾する。内面口縁上端に明瞭な沈線が巡る。	口縁部横ナデ。外面体部横・斜位の範削り(削りが均等でなく底面は不安定)。内面不定方向のナデ。橙褐色。A~E+細砂粒やや多い。焼成良好。	全体の70%現存。
坏	3	口径 11.8 器高 3.4	口縁は直立気味に立ち上がり、先端部で僅かに外反する。内面口縁上部に段をもち、端部は尖る。全体に扁平で器肉も薄い。	口縁部横ナデ。外面体部横をナデの後浅い不定方向の範削り。内面底面下定方向のナデ。赤褐色(内外面赤彩)。A~E+細砂粒。焼成良好。	口縁部60%、体部80%の現存。



第133図 第2号住居跡出土遺物(1)



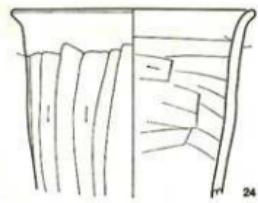
0 10cm

第134図 第2号住居跡出土遺物(2)

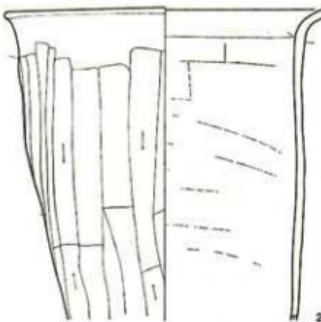
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
杯	4	口径 11.6 器高 4.2	口縁はほぼ中位に鈍い段をもち、内面気味となる。口縁内面中位は窪む。	口縁部横ナデ。外面体部横・斜位の箇削り。内面底部ナデ。暗褐色(内外赤彩)。A~E+細砂粒やや多い。焼成良好。	全体の60%現存。
杯	5	口径 11.6 器高 4.4	口縁は中位に段をもち外傾する。内面口縁上端に沈線が巡る。	口縁部横ナデ。外面体部斜位箇削り。内面ナデ。茶褐色(内外赤彩)。口縁部に焼付着。A~E+細砂粒やや多い。焼成良好。	完形。
杯	6	口径 13.0 器高 4.6	口縁は中位に鈍い段をもち。外傾する。内面口縁上端に沈線が巡る。	口縁部横ナデ。外面体部横・斜位の箇削り。内面ナデ。赤褐色(内外赤彩)。口縁部焼付着。A~E+細砂粒。焼成良好。	全体の70%現存。
杯	7	口径 12.4 器高 4.8	口縁は中位やや上に段をもち、外傾する。内面口縁中位は緩く窪む。底面はかなり肥厚する。	口縁部横ナデ。外面体部%までナデ、底面斜位箇削り。内面底面ナデ。茶褐色(内外赤彩)。A~E+粗砂粒やや多い。焼成良好。	口縁部60%、体部90%現存。
杯	8	口径 12.8 器高 5.0	口縁は中位やや上に段をもち、外傾する。内面口縁中位やや上に窪みをもち、口唇部直下に浅い沈線が巡る。	口縁部横ナデ。外面体部横・斜位の箇削り。内面横ナデ。茶褐色(外面赤彩)。A~E+粗砂粒やや多い。焼成良好。	口唇部を僅かに欠く。
蓋杯 蓋	9	口径 10.4 器高 3.4	口縁と天井部の境に沈線が巡る。	ロクロ右回転成形。 天井部%右回転箇削り(7回転)。内面不定方向ナデ整形。 暗灰褐色。黒色粒、白色粒、石英、2mm大小石やや多い。焼成堅敏。	完形。 須恵器。10とセット。
蓋杯 身	10	口径 9.0 器高 3.2		ロクロ右回転成形。 体部全面右回転箇削り(6回転)。内面不定方向ナデ整形。 灰色(灰褐色)。黒色粒、白色粒、1~2mm大小石含む。焼成堅敏。	完形。 須恵器。9とセット。
蓋杯 蓋	11	口径 11.9 器高 3.6	口縁と天井部の境に沈線が巡る。	ロクロ右回転成形。 天井部全面右回転箇削り(惰力が弱く中心がずれる)。一部手持ち箇削り。内面回転ナデ、天井部不定方形ナデ整形。 灰褐色。黒色粒、1~2mm大小石、白色粒やや多く含む。焼成甘い。	口縁90%、 体部100%現存。 須恵器。 12と酷似。

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋杯 蓋	12	口径 11.0 器高 3.9	口縁と天井部の境に沈線が巡る。	クロ右回転成形。天井部は右回転窓削り(6回転)。内面回転ナデ、天井部不定方向ナデ整形。灰褐色。黒色粒、1~2mm大小石、白色粒やや多く含む。焼成甘い。	口縁80%、 体部100%現存。 須恵器。11と酷似。
手捏ね 鉢	13	口径 9.4 底径 6.6 器高 11.2	胴中位やや上に2本の沈線が巡る。底部は斜めに立ち上がり、段をもって胴部に至る。	クロ右回転成形。 底部周辺右回転窓削り、他は回転ナデ整形。内面底部指頭ナデアゲ、他は回転ナデ整形。 暗灰色、断面茶褐色、黒色粒、白色粒やや多く含む。焼成堅緻。	口縁から胴部70%現存。 須恵器。
提瓶	14	現存高 4.5		クロ右回転成形。 外面回転ナデ整形。内面口縁と胴接合部をナデツケ、他は回転ナデ。	頸部40%現存。 須恵器。
小形甕	15	口径 13.2 底径 7.8 器高 13.4	口縁と胴部の境に棱をもち、口唇部は平坦に仕上げる。全体に器肉が厚い。最大径は胴中位にもつが全体に括れが少なく扁平な器形。	外面胴部横位窓削り後口縁部横ナデ、底部横位窓削り、内面窓ナデ。底面は中心にむけて方射状のナデ。 淡橙褐色、外面底部および胴部に吸炭。A~E+細砂粒多く含む。焼成良好。	口縁部90%、 胴・底部100%現存。
小形甕	16	口径 12.8 胴径 15.7 現存高 15.5	底部を内側から焼成後破碎している。穿孔部は、約7×8cmの不整円形を呈する。	口縁部横ナデ。外面胴部中位窓削り、下位は斜位、底部周辺は横位窓削り。内面ナデ。 赤褐色。A~E+粗砂粒やや多く含む。焼成やや甘い。	口縁部60%、 胴部40%現存。
小形甕	17	口径 13.0 胴径 18.4 底径 9.2 器高 17.5	口縁内面に緩い段をもつ。	口縁部横ナデ。外面胴部左上り斜位の窓削り、胴下位底部周辺は横位窓削り、底部削りの後ナデ。内面ナデ、底部ナデツケ。 赤橙褐色。A~E+粗砂粒やや多く含む。焼成良好。	口縁・底部100%、胴部90%現存。
小形甕	18	口径 11.6 胴径 13.9 底径 7.4 器高 11.4		口縁部横ナデ。外面胴部横位の浅い窓削り、底部削り後ナデ。 内面窓ナデ、底部中心にむけて方射状のナデ。 赤橙褐色。A~E+細砂粒やや多く含む。焼成甘い。	口縁80%、 胴部90%、 底部100%現存。 15に似るが作りは難。

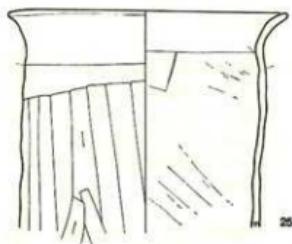
器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
小形甕	19	口径 14.3 胴径 18.4 現存高13.0	口唇部は丸縁で、口縁と胴部の境に鈍い棱をもつ。	外面胴部縱位窓削り後肩部を横・斜位窓削り、その後口縁内外面横ナデ。内面胴部ナデ。橙褐色。A～E+細砂粒やや多く含む。焼成良好。	口縁部90%、胴部60%現存。
甕	20	口径 16.4 胴径 25.3 底径 7.8 器高 29.8	口唇部は平坦で、外側に突き出る。	口縁横ナデ。外面胴部左上り斜位の窓削りの後、肩から胴中位まで斜位窓磨き、底部周辺横位窓削り。内面ナデ。茶褐色。外面胴部吸炭。A～E+粗砂粒多く含む。焼成良好。	口縁部90%、胴部80%、底部100%現存。
甕	21	口径 19.5 胴径 32.1 底径 11.6 器高 33.8	口唇部は平坦でやや外側をむく。 口縁と胴部の境に棱をもつ。	口縁部横ナデ。外面胴部削りの後、肩・胴下半部を横位、胴中位を斜位の窓磨き、底部窓削り後ナデ。内面ナデ。橙褐色、外面胴中位～下位に吸炭。A～E+細砂粒やや多く含む。焼成良好。	口縁部60%、胴部80%、底部100%現存。
甕	22	口径 18.6 胴径 24.3 底径 5.6 器高 30.5	底部と胴部の境は不明瞭。	口縁部横ナデ。外面胴部横・斜位の窓削り後、縱窓削り、底部周辺は横位窓削り、底部窓削り。内面木口状工具によるナデ。淡橙褐色、外面胴中位～下位に吸炭。A～D+細砂粒、2～8mm大の茶褐色粒を多く含む。焼成良好。	口縁部70%、胴部95%、底部100%現存。
甕	23	口径 20.7 胴径 18.5 底部 5.6 器高 35.7	全体に前後に潰れ、断面は梢円形を呈する。	口縁部横ナデの外面胴下半右下り斜位、上から下への縱窓削り後胴上半にむけての窓削り。内面は木口状工具によるナデ。淡茶褐色。A～E+細砂粒やや多く含む。焼成良好。	口縁部60%、胴部70%、底部50%現存。
甕	24	口径 17.8 現存高13.4	口縁は胴部から直線的に外傾し 口唇直下で外反する。	口縁部横ナデ。外面胴部縱窓削り。内面木口状工具による左上りのナデ。淡赤橙褐色。A～E+細砂粒多く含む。焼成甘い。	口縁部80%、胴部30%現存。
甕	25	口径 20.3 現存高15.5	横断面は梢円形を呈し歪んでいる。器肉は比較的薄い。	口縁部横ナデ。外面胴部縱窓削り。内面木口状工具および指頭ナデ。橙褐色。A～E+粗砂粒多い。焼成甘い。	口縁部90%、胴部50%現存。



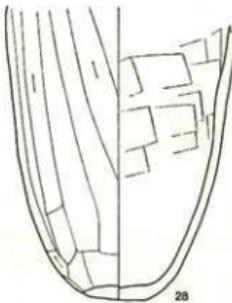
24



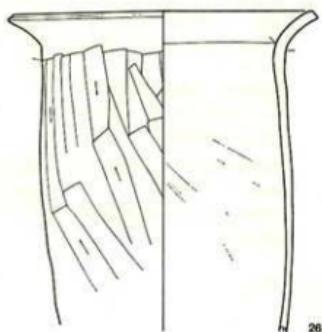
27



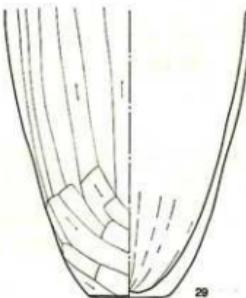
25



28



26

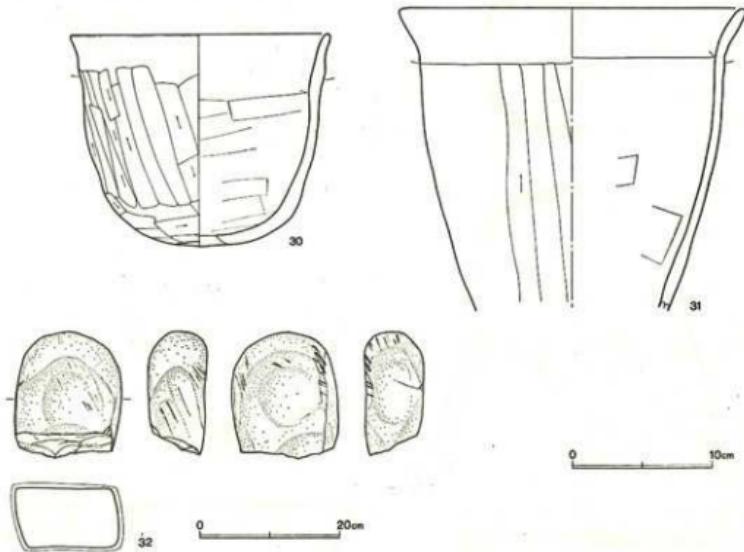


29

0 10cm

第135図 第2号住居跡出土遺物(3)

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
甕	26	口径 22.5 胴径 18.3 現存高23.2	口唇部平坦で中央が窪む。	口縁部横ナゲ。外面胴部上位から下への縱窓削り、胴中位左上より斜窓削り。内面は目の細かい木口状工具によるナゲ。 淡茶褐色。A～E+粗砂粒多く含む。焼成良好。	口縁部90%、 胴部50%現存。
甕	27	口径 23.4 現存高22.3	横断面は梢円形を呈し、胴部も斜めに歪んでいる。	口縁部横ナゲ。外面胴部下半下から上への縱窓削り後、肩から胴下半への縱窓削り。内面目の細かな木口状工具によるナゲ。 淡茶褐色。A～D+粗砂粒、2～5mm大茶褐色粒や目立つ。 焼成良好。	口縁部95%、 胴部60%現存。
甕	28	底径 4.4 現存高21.1	底部は水平でなく、かなり歪み、胴部との境も明瞭でない。	外面底部周辺斜窓削り後、下から上への縱窓削り、底部ナゲ。内面木口状工具によるナゲ。 暗褐色。A～D+砂粒多く含み、2～5mm大茶褐色粒も多い。焼成良好。	胴下半部60%、底部70%現存。
甕	29	底径 5.9 現存高20.8		外面胴部下から上への縱窓削り後下部を右下り斜窓削り、底部横窓削り。内面底部から胴部にかけて指頭ナゲ。	胴下半部・ 底部50%現存。
瓶	30	口径 18.7 孔径 2.5 器高 15.3	鉢の底部を内側から焼成後穿孔し、瓶に転用している。	口縁部横ナゲ。胴部やや斜位の窓削り、底部周辺は横窓削り。内面目の細かい木口状工具による入念なナゲ。 淡黄褐色、孔周辺から胴下部にかけて吸炭。A～E+細砂粒多く含む。焼成良好。	口縁部50%、 胴部90%現存。
瓶	31	口径 25.6 残存高21.8		外面胴部窓削り後、口縁部内外面横ナゲ。内面胴部ナゲ。 橙褐色。A～E+細砂粒少量。 焼成良好。	口縁部70%、 胴部40%現存。
砥石	32	17.5×14.8 ×8.4 4180g	断面長方形を呈し、下部を欠損する。表面は5面すべて使用している。頂部は丸味をもち、他は極めて平滑な面になっている。各面とも溝状の擦痕が數条認められる。	砂岩	



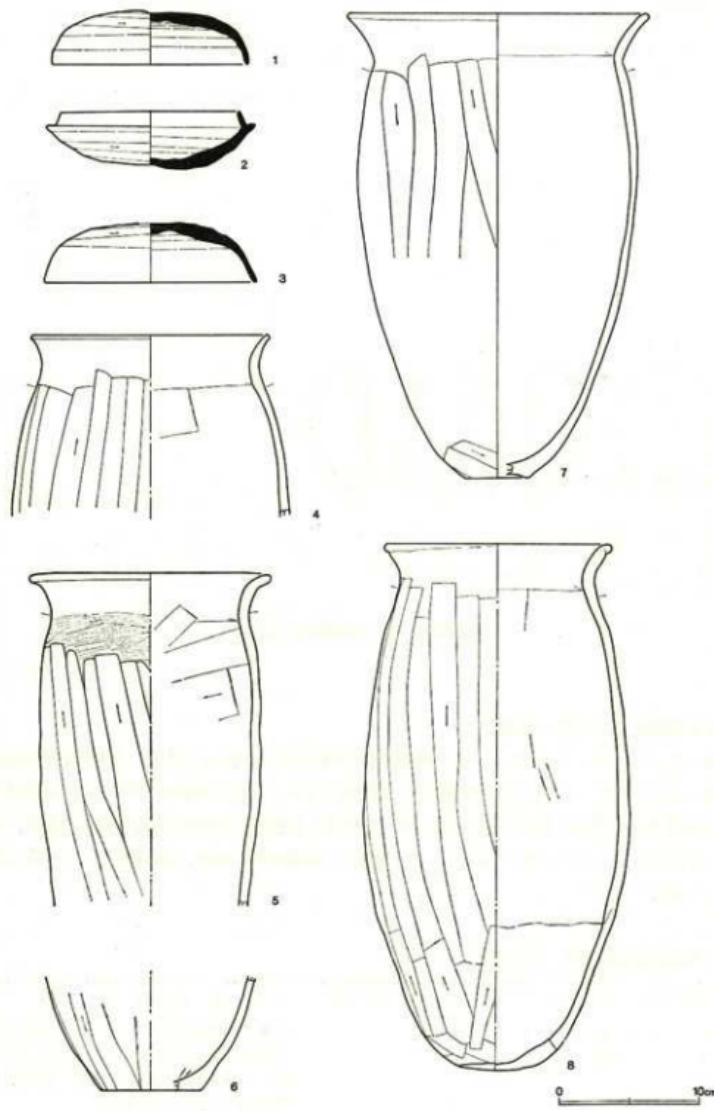
第136図 第2号住居跡出土遺物(4)

第3号住居跡（第130図、図版59）

D・E—3 グリッドに位置し、第1号住居跡に大半が切られている。また、遺構確認時に遺物と床面が露出するほど、保存状態の非常に悪い住居跡である。規模、形態は不明であるが、東壁で推定4.8mを測る。床面は軟弱で凹凸が激しく、中央部と南壁寄りに焼土が認められた。柱穴、カマド、貯蔵穴などの施設は検出できなかった。遺物は、須恵器蓋・坏身、甕が観られ、いずれも床面上より出土している。

第3号住居跡出土遺物（第137図）

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋 坏 蓋	1	口径 14.2 器高 3.8		口クロ右回転成形。 天井部右回転寛削り(4回転)。内面回転ナデ整形、天井中央部に一方向のナデ整形。 灰色。黒色粒、白色微粒子等の微砂粒含む。焼成堅緻。	口縁を欠き、90%現存。須恵器。



第137図 第3号住居跡出土遺物

器種	番号	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋坏身	2	口径 13.0 器高 4.1		ロクロ右回転成形。 底部%右回転窓削り(5回転)。 内面回転ナデ整形、底部中央に 一方向のナデ整形。 灰色。黒色粒、白色散粒子等の 散砂粒含む。焼成堅微。	完形。 須恵器。
蓋坏蓋	3	口径(17.4) 器高 4.2	天井部に粘土を補強している。	ロクロ右回転成形。 天井部全面、断続的な右回転窓 削り。内面回転ナデ整形。 灰褐色。長石、黒色粒、赤色粒、 白色散粒子等の砂粒含む。焼成 良好。	全体の80% 現存。
甕	4	口径(17.2) 現存高12.8		口縁部横ナデ。外面胴部下から 上への縦窓削り。内面胴部ナデ。 茶褐色。A~E+粗砂粒等多く 含む。焼成甘い。	口縁部70%、 胴部40%現 存。
甕	5	口径(17.4) 胴径 16.0 現存高23.8		口縁横ナデ。外面肩部目の細か い木口状工具によるナデ、胴部 下から上への縦窓削り。内面目 の細かな木口状工具によるナデ。 茶褐色。胴の一部の断面黒色化。 A~E+細砂粒。焼成やや甘い。	口縁から胴 部40%現存。
甕	6	底径 7.2 現存高 8.0		外面胴部上から下への窓削り、 底部周辺部を窓削り。内面ナデ。 茶褐色。A~E+粗砂粒やや甘 い。焼成やや甘い。	底部100%、 胴部50% 現存。
甕	7	口径 21.8 胴径 20.2 底径 4.6 器高 33.2	口縁部から胴中位の歪みが激し い。底面は上げ底を呈する。	口縁部横ナデ。外面胴部上から 下への窓削り。底面周辺斜位の 窓削り、底面窓削り。内面ナデ。 淡茶褐色(一部灰黒色)。A~E +細砂粒多く含む。焼成甘く、 内外面とも磨滅が激しい。	口縁部50%、 胴部70%、 底部90%現 存。
甕	8	口径(16.6) 胴径 19.2 底径 5.8 器高 37.5	最大径を胴中位下半にもつ下脹 れの器形。底部は胴部との境が 不明瞭で丸味をもち、安定が悪 い。	口縁部横ナデ。外面胴部下から 上への窓削り、底部周辺を斜、 横粒の削り、底面ナデ。内面ナ デ、粘土組接合部削りの後ナデ。 淡茶褐色、底面灰黒色。A~E +粗砂粒多く含む。焼成甘い。	口縁部30%、 胴部80%、 底部100% 現存。

(今井 宏・酒井和子)

## b 古 墳

寺ノ台遺跡では、1基の古墳が調査されているが、これは「寺ノ台古墳」として『埼玉県史』(埼玉県 1982)で報告されたものに相当する。

### 第1号墳 (第139図、図版55)

調査区中央に存在する第1・3号住居跡の南、標高72.5mのD-5グリッドに位置する緩傾斜面より検出されている。

墳丘らしき高まりは、調査時にほとんど認められず、表土剥ぎ終了後に石室が確認されたものである。天井石も無く、根石が一段残る程度に保存状態の悪い古墳である。

石室は凝灰岩割石を使用し、奥壁が弧状にすぼまる半椭円形の小形両袖型横穴式石室である。全長3.15m、玄室長2.0m、同最大幅1.42m、同最小幅0.9m、羨道長1.15m、同幅0.7m。主軸方向はN-6°-E、真南に近く開口している。

奥壁は3個の割石が使われ、弧を意識してか、中央に湾曲した割石が置かれている。側壁は内面が羨として取りされたほぼ同大の横長割石を並べている。門柱石は認められず、板状綠泥片岩の框石が羨道と玄室を区画している。羨道は3段残るが、小形の割石が雜に積まれている。棺床面は拳大から人頭大の偏平な自然礫が雜に敷かれ、南側へ緩く傾斜している。

掘り方は、黄褐色土を4.02×2.4m、深さ0.4mの椭円形に掘り込み、凝灰岩屑を多量に含む茶褐色土で構築面を水平に整形し、石室を築いている。周辺を精査したが、周溝は存在していない。遺物の出土は皆無であるが、構築方法等の特徴から終末期の古墳と思われる。

(今井 宏)

埼玉県「新編埼玉県史 資料編2」 埼玉県 1982

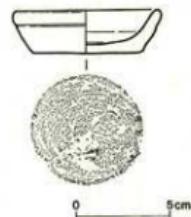
## (2) 近世の遺構と出土遺物

### 第1号塚 (第140図、図版56)

中央部平坦面に立地し、第2号塚の北西約45mを測る。規模は径6m×5.8m、高さ12.5mを測り、ほぼ円形を呈する。盛土は上から、腐植土を含む濃茶褐色土、軟らかい砂質茶褐色土、黒色土混入茶褐色土、粘性をもちローム混入黄褐色土、黒褐色土の5層に分かれる。出土遺物はカワラケが1点(第138図)である。口径8cm、器高2.3cmを測り、口縁を僅かに欠く。ロクロ右回転成形。底面は右ロクロ回転糸切りである。淡橙褐色を呈し、焼成は良好である。

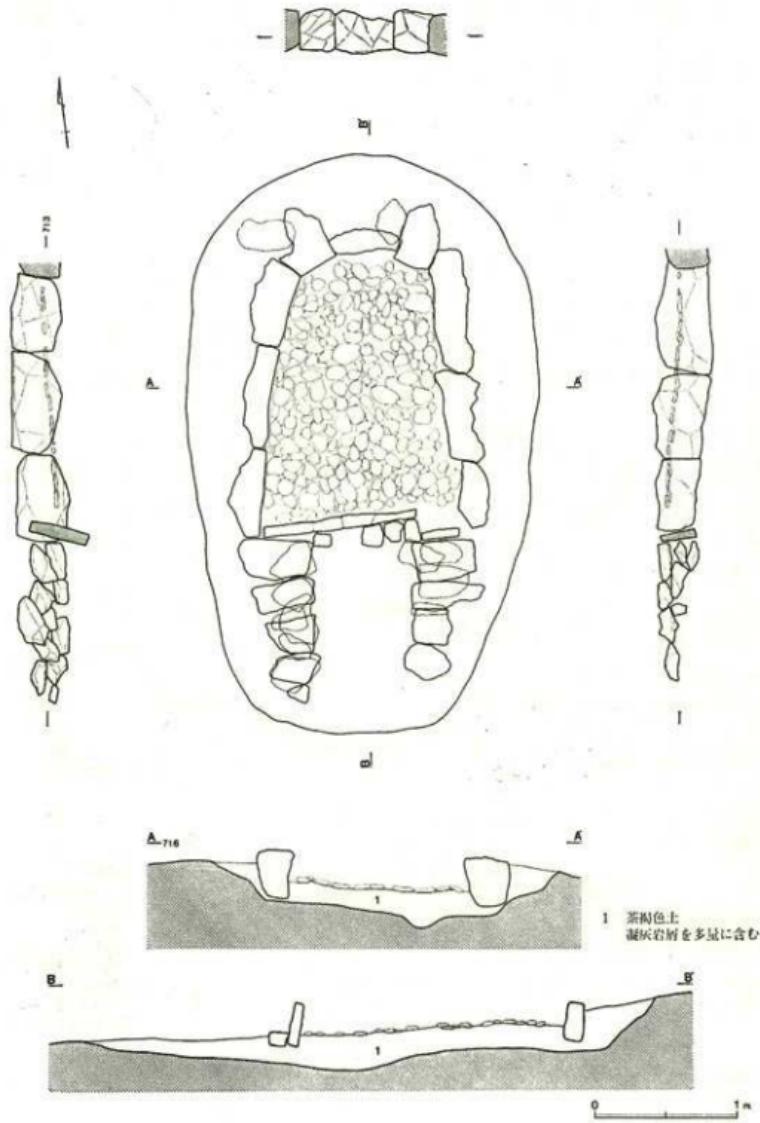
### 第2号塚 (第141図、図版56)

第1号塚の南西約42mの緩傾斜面に位置する。規模は径4.2m×3.8m、高さ1.1mを測り、ほぼ円形を呈する。盛土は上から多量の腐植土を含む濃茶褐色土、軟らかい砂質茶褐色土、粘性の強い濃茶褐色土、粘性が強く炭化物、焼土を少量含む黒色土の4層に分かれ、つき固められた痕跡は認められない。出土遺物はない。

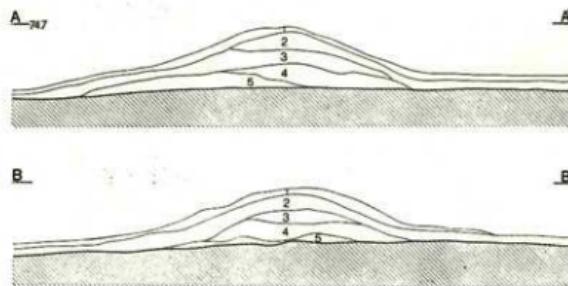
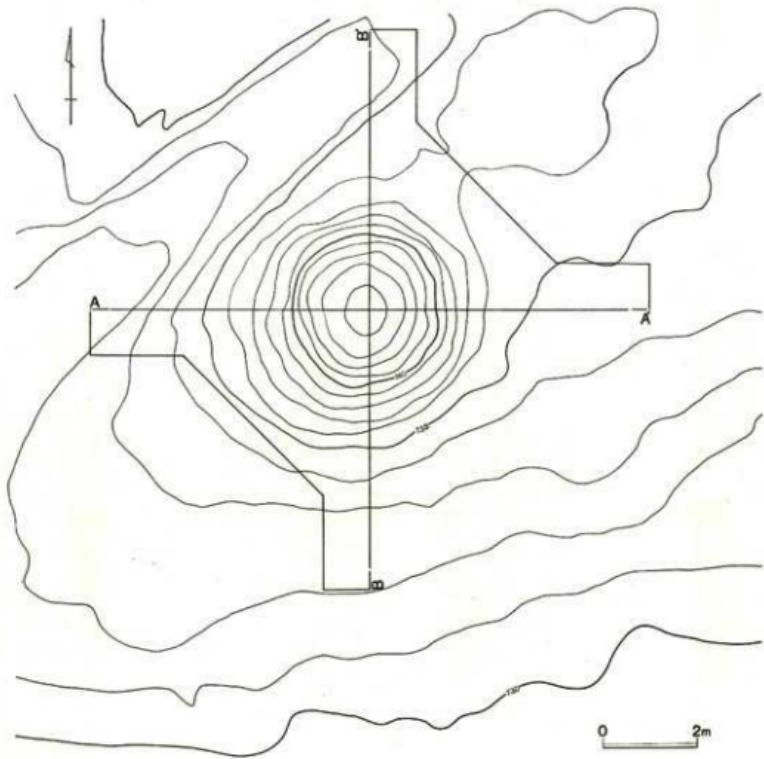


第138図 第1号塚出土遺物

(酒井和子)

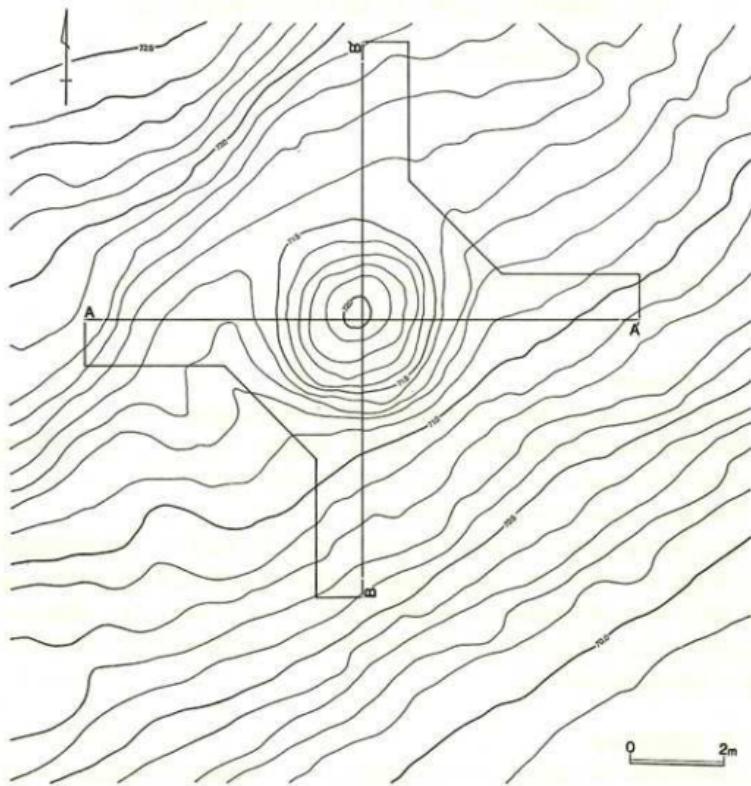


第139図 第1号墳

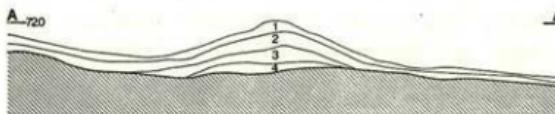


1. 深茶褐色土  
多量の腐植土を含む
2. 茶褐色土  
砂質が強い
3. 茶褐色土  
少量の黒色土混入
4. 黄褐色土  
多量のソフトロームを含み  
弱い粘性をもつ
5. 黒褐色土  
強い粘性をもつ

第140図 第1号塚



0 2m



1. 深茶褐色土  
多量の腐植土を含む

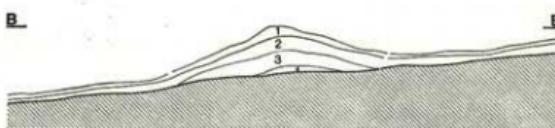
2. 茶褐色土

砂質が強い

3. 深茶褐色土  
弱い粘性をもつ

4. 黒色土

少量の炭化物・焼土を含み、  
強い粘性をもつ



第141図 第2号塚

## V 屋田遺跡出土遺物のX線回折分析および電子顕微鏡観察

### 1 実験

#### 1-1 試料

分析に供した試料は第1表胎土性状表に示すとおりである。

X線回折試験に供する置物試料は洗浄、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。

電子顕微鏡観察に供する置物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\%$ の試料台にシルバーベースで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

#### 1-2 X線回折分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定は、X線回折分析法によった。

測定には理学電機製X線回折装置を用い、X線管球、銅対陰極、フィルター、ニッケル、印加電圧—電流、30kV—15mA、スリット系： $1^\circ - 0.15\text{mm} - 1^\circ$ の条件で行った。

走時速度は、 $2^\circ/\text{min}$ 、フルスケールは800カウントとした。

なお、胎土の分析に先だって、原土と思われるローム質粘土の分析を行った。X線回折試験は原土、電気炉において $700^\circ\text{C}$ 、 $900^\circ\text{C}$ で各々1時間焼成した試料（同一試料を石英ガラスに定着し、原土、 $700^\circ\text{C}$ 、 $900^\circ\text{C}$ と順次実験を行う）の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析を行った。ただ $900^\circ\text{C}$ 以上になった場合の組成については明らかではなく、今後の検討が必要である。

#### 1-3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合いについての観察は、電子顕微鏡によって行った。

観察には日本電子製T-20を用い、倍率は $\times 45$ 、 $300$ 、 $700$ 、 $1500$ 、 $4500$ の5段階で行い、写真撮影をした。 $45 \sim 300$ 倍は胎土の組織、 $700 \sim 4500$ 倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

### 2 実験結果の取り扱い

実験結果は第1表胎土性状表に示すとおりである。

第1表右側には、X線回折試験に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類を行った結果を示している。

X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現われる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）をmm単位で測定したものである。

ガラス量は大略 $2\theta = 10^\circ \sim 20^\circ$ の範囲にあって、チャートが全体に腫れあがるブロードな現象を



示す部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較の材料とした。

電子顕微鏡観察によって得られたガラス量と、X線回折試験におけるガラス量とを比較対比し、さらにムライト (Mu)、クリストバーライト (Cr) などの組成上の組み合わせとによって焼成ランクを決定した。

## 2-1 組成分類

### i) Mo—Mi—Hb三角ダイヤグラム

第144図に示す様に三角ダイヤグラムを①～⑩に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。

Mo、Mi、Mbの3成分の含まれない胎土は記載不能として⑪に含め、別に検討した。三角ダイヤグラムは、モンモリロナイト (Mo)、雲母類 (Mi)、角閃石 (Hb) のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、百分率 (%) で表示する。

モンモリロナイトは  $Mo/(Mo+Mi+Hb) \times 100$  で百分率として求め、同様に Mi、Hb も計算し、三角ダイヤグラムに記載する。

三角ダイヤグラム内の①～④は Mo、Mi、Hb の3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。

位置分類についての基本原則は第142図に示すとおりである。

### ii) Mo—Ch、Mi—Hb菱形ダイヤグラム

第145図に示す様に菱形ダイヤグラムを①～⑩に分割し、位置分類を数字で示した。記載不能は⑪として別に検討した。

記載不能はモンモリロナイト (Mo)、雲母類 (Mi)、緑泥石 (Ch)、角閃石 (Hb) のうち⑪3成分以上含まれない、⑫Mo、Ch 2成分が含まれない、の3例がある。菱形ダイヤグラムは Mo—Ch、Mi—Hb の組み合わせを表示するものである。Mo—Ch、Mi—Hb の各々の X 線回折試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎に百分率で表すもので、例えば、 $Mo/(Mo+Ch) \times 100$  と計算し、組み合わせ百分率を記載したものである。

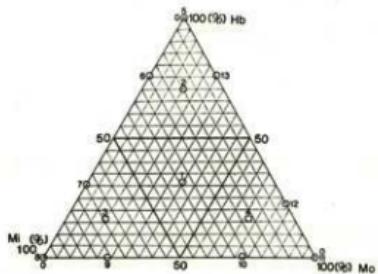
菱形ダイヤグラム内にある①～⑦は Mo、Mi、Ch、Hb の4成分を含み、各辺は Mo、Mi、Ch、Hb のうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。①—1 と ①—2 は現在のところ大きな意味はないが、胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分が必要なものとなるかもしれない。しかし現在は①として一括して取り扱った。

位置分類についての基本原則は第143図に示すとおりである。

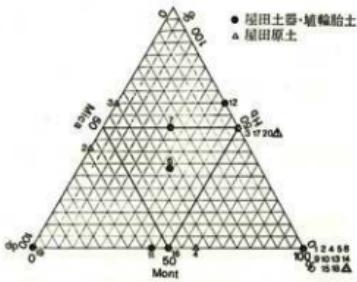
## 2-2

焼成ランクの区分は X 線回折試験による鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。

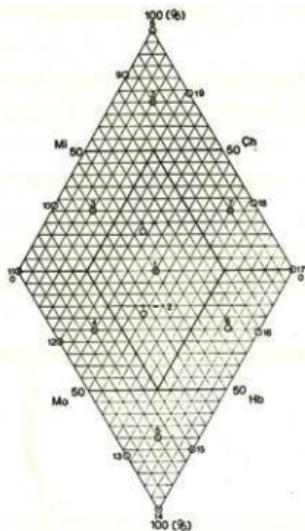
ムライト (Mu) は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバーライト (Cr) はムライトより低い温度、ガラスはクリストバーライトより更に低い温度で生成



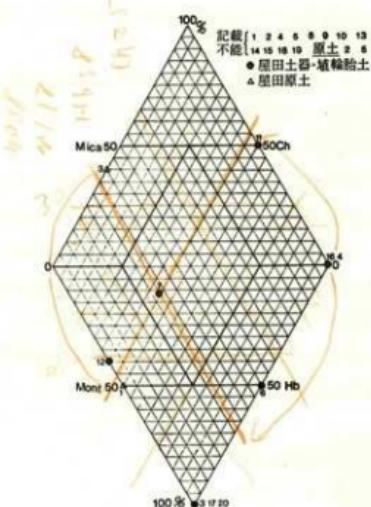
第142図 三角ダイヤグラム位置図



第144図 Mo-Mi-Hb 三角ダイヤグラム



第143図 菱形ダイヤグラム位置図



第145図 Mo-Ch, Mi-Hb 菱形ダイヤグラム

する。

これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをI～Vの5段階に区分した。

⑥焼成ランク I…高温を示すムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広い。

⑦焼成ランク II…ムライトとクリストバライトが共存し、単位ガラスの面積が狭くなる。

⑧焼成ランク III…ガラスの中にクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面を成し、ガラスのつながりに欠ける。

⑨焼成ランク IV…ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小な葉状を呈する。

⑩焼成ランク V…原土に近い組織を有し、ガラスはほとんどできていない。

以上のI～Vの分類は原則であるが、原土の材質、すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、クリストバライトなどの組み合わせといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点については第1表の右端の備考に理由を記した。

### 2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムし位置分類による組み合わせによって行った。同じ組成をもった土器胎土は、位置分類の数字組み合わせも同じはずである。

タイプ分類は、三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組み合わせのものは同じ文字を使用し、表現した。

例えば三角ダイヤグラムの①と菱形ダイヤグラムの①-1の組み合わせはA、三角ダイヤグラムの②と菱形ダイヤグラムの②はB、という具合にである。

各文字の後の( )内の数字は、三角、菱形ダイヤグラムの位置分類の数字を合計したものである。近い組織を示しながら、位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には、試料数の多いものの類似としてA'などダッシュをつけて分類した。

なお、タイプ分類のA、B、C等は便宜上であり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。

## 3 実験結果

### 3-1 タイプ分類

土器胎土は第1表胎土性状表に示すように、第144図三角ダイヤグラム、第145図菱形ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいて、A～Hの8タイプに分類される。

土器胎土の焼成ランクはIII～IVで、ガラスはほとんどが微小、あるいは葉片状を呈し、ムライト、クリストバライトが生成するほど高くはない。

#### Aタイプ…土器Ya-7

モンモリナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の 4 成分を含み、比較的粒径のそろったローム質粘土で構成される。ガラスは葉片状を呈し、焼成ランクはⅢ～Ⅳとあまり高くない。

#### Bタイプ…土器Ya-6

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb) の 3 成分を含み、緑泥石 (Ch) に欠ける。粒径のそろった均質な粘土で構成される。ガラスは葉片状を呈し、焼成ランクはⅢ～Ⅳとあまり高くない。

#### Cタイプ…土器Ya-11

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica)、緑泥石 (Ch) の 3 成分を含み、角閃石 (Hb) に欠ける。胎土は粒径のそろった材質に、良質な粘土である。ガラスは細粒ガラスで、原土の組織をよく残しており、焼成ランクはⅢ～Ⅳとあまり高くない。

#### Dタイプ…土器Ya-1、2、4、5、8、9、10、原土5、埴輪Ya-13、14、15、18

モンモリロナイト (Mont) の 1 成分だけを含み、雲母類 (Mica)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の 3 成分に欠ける。

発掘現場周辺の露頭より採取した原土5試料のうち№5の乳白色、凝灰質粘土の組成とほぼ一致しており、在地性の土器胎土と判定される。

Ya-1は粘土紐、Ya-2は土器整形の際の削り屑で、ともに発掘現場で採取されたものである。これらと原土5は、成分的に一致しており、同じ組成をもつ土器胎土は在地性と断定される。

Dタイプの土は主に  $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$  とモンモリロナイトを主成分とする比較的良質の粘土であると推察される。

#### Eタイプ…土器Ya-3、埴輪 Ya-17、20

モンモリロナイト (Mont)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の 3 成分に欠ける。粗粒の石英、斜長石を混入するローム質粘土で構成され、ガラスは微小で、原土の組織をよく残しており、焼成ランクはⅢ～Ⅳとあまり高くない。

#### Fタイプ…埴輪Ya-19

雲母類 (Mica) のみ含み、モンモリロナイト (Mont)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の 3 成分に欠ける。細粒の石英、斜長石を混入する均質な粘土で構成され、ガラスは発泡し、焼成ランクはⅡと高い。

#### Gタイプ…埴輪 Ya-16

モンモリロナイト (Mont)、雲母類 (Mica) の 2 成分を含み、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の 2 成分に欠ける。粗粒の石英、斜長石を混入するローム質粘土で構成され、ガラスは微小で、焼成ランクはⅣとひくい。

#### Hタイプ…埴輪 Ya-12

モンモリロナイト (Mont)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の 3 成分を含み、雲母類 (Mica) に欠ける。

### 3-2 石英(Qt)一斜長石(Pl)の相関について

第146図 Qt-Pl相関図はX線回折試験によって得られた石英(Qt)と斜長石(Pl)の強度高を単純にグラフ化したものである。実験はFullscale800countに条件設定したものであり、この条件下におけるチャート上の強度高をミリメーター単位であらわしている。

石英、斜長石は砂の主成分であり、土器製作過程で粘土中に混入される。砂における石英、斜長石の量比は後背地の地質および運搬過程における流速などの条件によって変化し、ある地域においては大まかにある一定の比率を有するものと推察される。

ある地域におけるある比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは、各集団における技術上の問題である。例えば、同一集団において使用する粘土は若干異なっても、砂の粘土に対する混合比はある一定の量比にあると考えられる。すなわち、各集団における土器焼成温度は、燃料の相違、燃焼のさせ方など異なっていたであろうし、燃料の原材料となる木材の相違、いいかえれば植生によっても異なったであろう。

粘土に対する砂の混合比は、各集団が維持した土器焼成温度と密接な相関をもつたであろうと推察される。すなわち、維持した土器焼成温度において良質の土器を焼きあげるために、粘土の材質と砂の混合比を経験的に決定したものであり、砂の混合比は純然たる土器焼成上の問題であると推察される。

星田遺跡におけるQt-Plの相関は第146図に示すとおりである。土器および埴輪は、概略、I～IVの4つのグループに大別される。

I グループ……Ya-1、9、11、埴輪Ya-15、16、18

石英(Qt)は19～120、斜長石(Pl)は20～40の範囲にある。

個体数は土器3個、埴輪3個と集中度はIグループ中、最も高い。

II グループ……Ya-3、6、7

石英(Qt)は115～135、斜長石(Pl)は45～60の範囲にある。

個体数は土器3個と少ないが、隣接するIグループとは斜長石(Pl)のレベルで一段高く、異なる集団を形成する。

III グループ……Ya-2、埴輪Ya-12

石英(Qt)は150～160、斜長石(Pl)は60の範囲にある。

個体数は土器1個、埴輪1個と少ないが他のグループとは異なる集団を形成する。

IV グループ……Ya-5、8、10、埴輪Ya-13、14

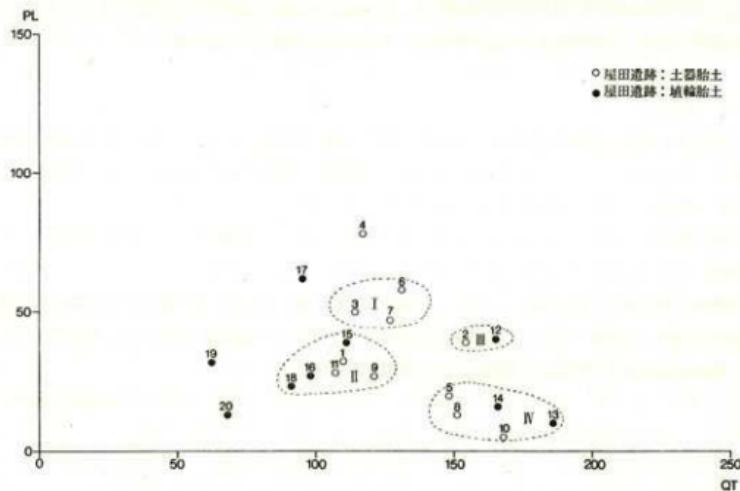
石英(Qt)は145～190、斜長石(Pl)は5～20の範囲にある。個体数は土器3

個、埴輪2個であるが石英(Qt)の幅が広く、バラつきが大きい。

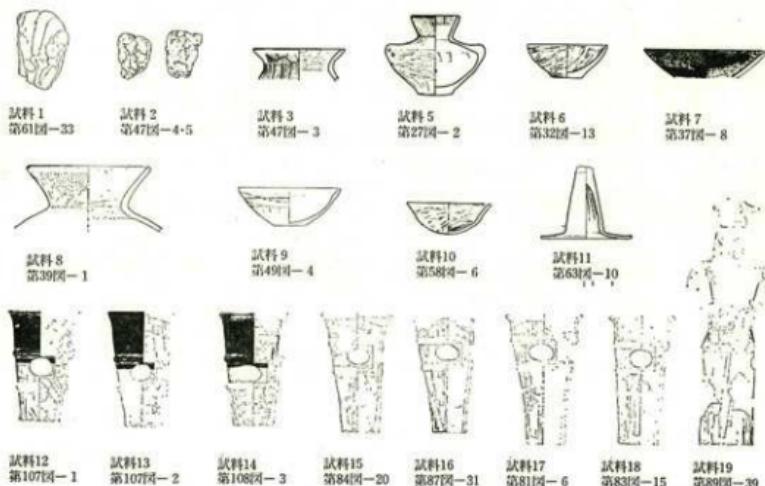
その他……Ya-4、埴輪Ya-17、19、20

これら4つの胎土はI～IVの4つのグループには属さないもので、各々、固有の比率を有する。

砂の混合比により、土器および埴輪をI～IVの4つの大きなグループとその他に区分できた。前記の前提条件に基づいて考察するならば、I～IVの各グループは各々別の集団によって製作されたものであり、その他も各々別集団を意味するものであろう。



第146図 QT—PL 相関図



第147図 分析資料一覧

各グループが同時代の別集団を意味するか、同一集団の時間の相違を意味するのかは、別に土器、埴輪の形態、出土層準による時代の決定との対比によらなくてはならない。

### 3-3 まとめ

土器胎土11試料、埴輪胎土9試料、原土5試料を分析した結果、Dタイプのものが在地性と判断された。Dタイプはモンモリロナイト (Mont) と  $n\text{Al}_2\text{O}_3 \cdot m\text{SiO}_2 \cdot l\text{H}_2\text{O}$  で構成された良質の粘土である。焼成ランクはⅢ～Ⅴであるが Ya-9 はⅡ～Ⅲと高く、ガラスも発泡ガラスが生成し、他のものと温度的に異なっている。また、Dタイプの中で Ya-8 は緑泥石 (Ch) を含んでおり、位置分類では同じ記載不能の②に入るが、粘土鉱物組成的にはいくぶん異なる。

在地性と異なるものは、Ya-3、6、7、埴輪Ya-12、16、17、19、20である。これらは鉱物組成から在地性とは判断しがたく、外来性と推察される。Qt—Pl 相関図においても、埴輪 Ya-17、19、20はその他に入っており、組成と一致する傾向にある。

(井上 敏)

## VI 結語

### 1 吉ヶ谷期の遺構と遺物について

屋田遺跡は、北比企丘陵裾部を縫って東流する市の川を北方眼下に臨む、比高差6mを測る右岸の台地上に立地している。縄文時代早期燃系文期から近世に至る多期にわたり、断続的に形成された複合遺跡である。

遺跡が立地する台地は、東西両側を開析谷に区画され、北東方向へ突出している。標高50mの等高線が傾斜変更線を形成し、台地端部は急崖となり、沖積地へ下っている。台地上には、五領期住居跡群や古墳群が濃密に分布する、東西に長い平坦面が存在している。住居跡群の南側には、遺構が全く存在しない緩傾斜面が200m程連続し、さらに台地肩部に存在する古墳群とは異なる古墳群が存在する、台地奥部の平坦面へと連続している。また、台地奥部には、小さな開析谷が入り組み、複雑な地形を描き出している。

ここでは、屋田遺跡における吉ヶ谷期の住居跡と出土遺物についての事実関係を把握しながら、特筆すべき事実を中心に検討を加えてみたい。

吉ヶ谷期の遺構としては、4軒の住居跡が検出されている。住居跡の全容が把握できたのは、第15号住居跡1軒である。他の第14・21・22号住居跡は、後世の擾乱や調査区外であるために、大半もしくは一部を欠いている。住居跡間には、重複関係が認められず、また住居跡以外の吉ヶ谷期の遺構は、全く確認されなかった。

確認された住居跡は、台地肩部と遺構の存在しない緩傾斜面を挟み、約300mの距離を置く台地奥部平坦面の2地点に存在している。台地肩部に存在する3軒の住居跡は、標高50mの等高線に沿い、第14・15号住居跡間13.5m、第15・21号住居跡間5mの間隔で検出されている。台地奥部平坦面に存在する第22号住居跡は、保存状態が悪く、器形をうかがえる土器の出土が観られず、明確な時期比定は不可能であるが、その立地条件などから、屋田遺跡には、2つの吉ヶ谷期集落が存在したものと推定される。

先述のように屋田遺跡で完掘できた住居跡は、第15号住居跡1軒である。この住居跡は、根平遺跡（水村1980）や桜山古墳群（小久保1981）などの新しい資料の追加により、ある程度共通認識化された吉ヶ谷期住居跡にくらべ、一般的でないいくつかの特徴を備え、また新たな問題を投げかけている。

第15号住居跡は、N-40°-Eを主軸とする5.39×4.17mの整った長方形を呈し、整然と配置された主柱穴が5本存在し、いずれも径15cm、深さ95cmの柱痕が認められる。東壁と南側コーナーの一部に壁溝が掘り込まれ、不整梢円形の地床炉が主柱穴P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>を結ぶ線上から外側にかけて設置されている。遺物は、覆土からは小破片の出土も無く、完形の甕1点が炉跡から、他はすべて南側コーナーの床面に据え置かれた状態で出土している。そして北壁下には、この住居跡の特殊性を示唆するベッド状遺構が付設されている。

周辺の吉ヶ谷期の住居跡で、ベッド状遺構が付設されたものとして篠田遺跡第7号住居跡が報告

(村田1982) されている。この住居跡も共通認識から外れるもので、焼失家屋であり、地床炉をもつが、柱穴が全く存在していない。報告の中でベッド状遺構について詳細な検討がなされ、ベッド状遺構を祭儀を行なう場としているが、屋田遺跡第15号住居跡の場合、遺物の出土状態や住居跡に占めるベッド状遺構の存り方から寝所としての可能性も無視できないものと考えられる。

第15号住居跡出土遺物(第17図)は、菱形土器5点、高杯形土器3点、鉢形土器1点、台付鉢形土器1点の10点である。菱形土器(3)は倒立、(2)・(4)・(5)は正立の状態で置台に利用されたもので、いずれも上面が磨滅し、それを裏付けている。菱形土器は、器形・整形とも同一で、胴部が丸味をおび、口縁部が緩く外反している。笠田遺跡第7号住居跡の菱形土器に酷似している。高杯形土器は、低い脚に浅い鉢をのせたもの(6)と高い脚のもの(8)が存在している。単純口縁の鉢形土器(9)、類例のない台付鉢形土器(10)は、丁寧な筐磨きが施されている。

以上、簡略に述べてきたが、柿沼氏の編年(柿沼1982)によるⅢ式に位置づけられ、台付菱形土器が伴出する根平遺跡第4号住居跡や桜山古墳群Y2号住居跡よりやや先行するものと思われる。

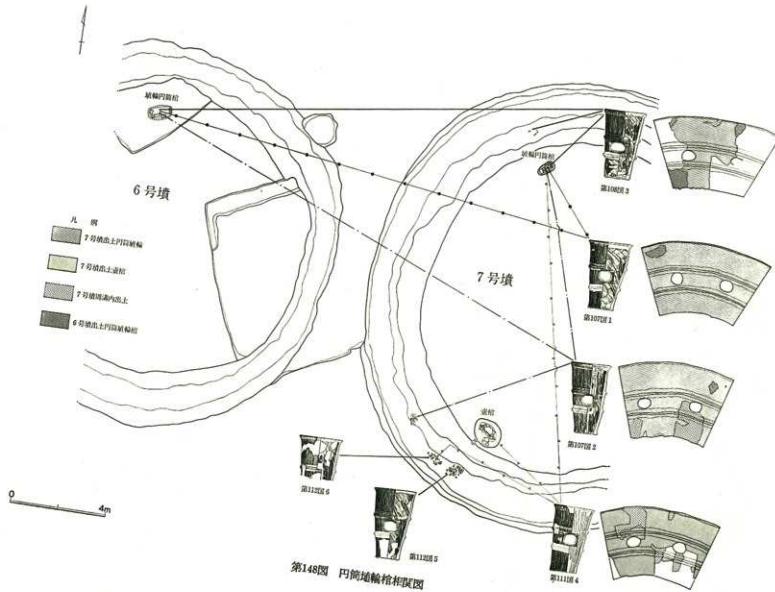
## 2 円筒埴輪棺および壺棺の接合関係について

屋田遺跡では9基の古墳が調査され、第6号墳から円筒埴輪棺、第7号墳から円筒埴輪棺と壺棺が検出され、総計6個体の円筒埴輪が出土している。発掘調査の段階では、その事実を見落としていたが、円筒埴輪の復原作業時に、各円筒埴輪間に接合関係が存在する興味ある事実が判明した。ここでは、円筒埴輪棺・壺棺に対する詳細な検討の用意がないため、接合関係の事実報告を行う。

円筒埴輪棺・壺棺の出土状態については、先に触れたとおりであるが、少しまとめてみたい。第6号墳円筒棺は、攪乱や調査中の盗難のために一部不明瞭な点も認められるが、周溝から1m程離れた墳丘北側裾部に検出された。 $1.06 \times 0.68$ mの隅丸方形の掘り方に、第7号墳円筒埴輪棺3個体の一部を使用して埋設されていた。埋設状態は、第7号墳円筒埴輪棺とは異なり、破片で周囲を覆う程度であったと推定される。第7号墳円筒埴輪棺は、墳丘北側裾部に位置し、 $0.7 \times 0.44$ mの浅い梢円形掘り方に、3個体の円筒埴輪(第107図1・2、第108図3)が埋設されていた。埋設状態は、口縁部を北東に向か横位に置かれた身(1)に、(2)が同方向に咬み合わされ、蓋(3)で閉塞されていた。壺棺は、墳丘南西裾部に位置し、 $1.34 \times 1.04$ mの浅い梢円形掘り方に、底部を欠失した大形の壺形土器と、蓋と推定される円筒埴輪(第111図4)が埋設されていた。また壺棺の外側周溝からは、2個体の円筒埴輪(第112図5・6)が出土している。(5)はどれとも接合関係のないものである。円筒埴輪棺の可能性が強いが、調査時の所見では断定できない。

第148図は、接合関係を図化したものであるが、次に理解し得る接合関係をまとめてみたい。

第7号墳円筒埴輪棺の身(1)・(2)及び蓋(3)には、接合関係がないが、身(2)の底部が壺棺外側の周溝内、蓋(3)の口縁部が円筒埴輪棺の外側周溝内から検出されている。蓋(3)の口縁部は埋設後の流れ込みの可能性もあるが、身(2)の出土状態は流れ込みでなく、埋設時に周溝内で打ち欠いたものか、破片を廃棄したものと推定される。第6号墳円筒埴輪棺は、第7号墳円筒埴輪棺の身(1)・(2)の口縁部、蓋(3)の口縁部及び基底部で構成されているが、第7号墳円筒埴輪棺埋設後に、それぞれを抜い



第148圖 內筒輪軸相應圖

て埋設したものである。壺棺の蓋(4)の口縁部が、円筒埴輪棺より検出されているが、埋設順位を明確にする根拠がない。

円筒埴輪棺と壺棺の接合関係を要約してきたが、この接合関係の示唆する問題は多いものと思われる。

(今井 宏)

#### 引用・参考文献

- 柿沼幹夫「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古5号』 土曜考古学研究会 1982  
石岡應雄「吉ヶ谷式と岩鼻式土器について」『研究紀要4号』 埼玉県立歴史資料館 1982  
井井尚明「埼玉県における弥生時代研究の現状と問題点」『情報7』 埼玉考古学会 1980  
村田健二・井上尚明・劍持和夫・富田和夫・西口正純「埼玉の弥生後期関連遺跡と土器」 1982  
水村孝行・今井宏「根平」埼玉県遺跡調査報告書第27集 1980  
栗原文藏・谷井彪「駒堀」埼玉県遺跡調査報告書第4集 1974  
小久保徹「桜山古墳群」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第2集 1981  
金井塚良一「原始・古代の吉見」『吉見町史』吉見町 1978  
中島利治「比企地方の弥生式土器」『北武藏考古資料図鑑』 1976  
栗原文藏「岩の上・雉子山」埼玉県遺跡調査報告書第1集  
橋本博文「円筒棺と埴輪棺」『古代探叢』 早稲田大学出版部 1980  
金井塚良一・渡辺久生「野本東部遺跡群発掘調査報告」 東松山市教育委員会 1979

### 3 繩文時代晚期終末の問題について

市の川右岸の標高約50mの台地肩部から出土した縄文時代終末期の土器群は、1号墳を中心とした500m程の狭い範囲に集中しており、他のこの時期の遺跡同様遺構は検出されていない。本遺跡の上流約1kmには、やはり浮線網状文土器が発見された嵐山町花見堂遺跡（金井塚他1976）が所在し、距離的にも近く、立地等も類似している。両遺跡の周辺には類似した地形が広がっており、今後、該期の遺跡が増加していく可能性もあり、興味のある地域である。

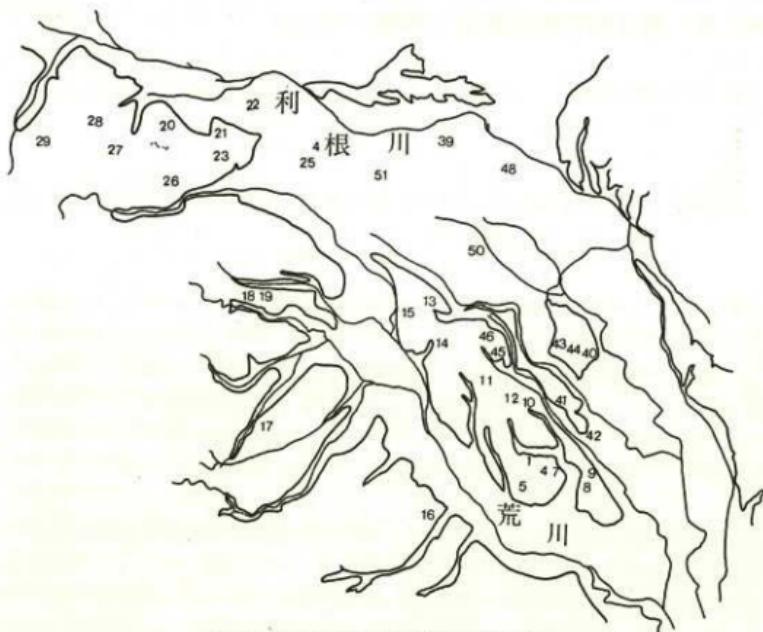
本遺跡出土の浮線網状文土器は、いわゆる千網式土器（蘭田1950他）であり、千網谷戸遺跡出土土器とは若干の相違は見られるが、浅鉢形土器の口縁内面の沈線や浮線結合部の点刻等から千網I式でも新段階のものと考えられる。花見堂遺跡とも時期的には大差はないものと思われるが、焼成、胎土等に違いが見られ、同一地域でありながら系統の違いを感じさせる。浮線文の土器は、本遺跡では黒色系で薄手、堅緻であるのに対して、花見堂遺跡出土土器は全体的に厚手で焼成の良くないものが目立つ。胎土も本遺跡程良くなく、黄褐色系を呈するものが多い。文様構成も花見堂例はより複雑化しており、口縁内面の沈線も2本である場合が多い。ただし1点だけ（第34図10）撫糸原体RとLの差はあるが、本遺跡Ⅲb類に比定できるものがあり、焼成も良好で色調も黒褐色系を呈している。いわゆる粗製土器については、本遺跡の条痕文、花見堂遺跡の撫糸文と決定的な違いがある。このようなことから、花見堂遺跡出土土器群の方がより千網式土器に近い要素をもつことを伺うことができる。これに対して、本遺跡出土土器は、黒色系で薄手、滑沢、丁寧な製作のⅡ類～Ⅳ類土器に褐色系のⅠ類土器が混在する点や、櫛目状擦痕の粗製土器が主体を占める点等から杉田D類（杉原他1963）にその類例を求めることができる。

この両遺跡は時期的にも距離的にも近いのに関わらず、以上のような看過し難い相違が見られ、両遺跡を有機的に関連付けることは困難である。つまり異質な集団が各々残した点の遺跡であり、同一地域における縄文時代終末期の拡散した文化の状況を見ることができる。

出土した土器はすべて小破片であるため完全な器形を知ることはできないが、鉢形土器が主体を占めている。このことは一人子遺跡（馬目他1970）で大洞C<sub>2</sub>式とA式の器種構成の比較で、鉢形土器が5%から49%へ増加しているという分析と一致する。

浮線網状文系のⅠ～Ⅳ類のわずか9片の鉢形土器口縁部破片でも、小突起を持つⅠ類、波状口縁のⅡ類、平縁のⅢ、Ⅳ類と形態に差が見られる。Ⅰ類については、大形の鉢でⅡ～Ⅳ類とは色調、胎土共異なっており、花見堂的な土器である。Ⅱ、Ⅲ類の浮線部の作り方は、ネガとしての沈線を複数引くことによって浮線を陽刻する陽彫技法を基本としている。この浮線を点刻、ずらし、沈線施文時に引き寄せられてきた粘土等で連結し、さらに分岐によってより複雑な文様を構成している。連結の単位については不明であるが、Ⅲb類（第11図6）のように連結部が1段目と2段目がずれている例もある。このことから厳密な収束単位が薄れていき浮線文の構造が崩れ始めていく様相が感じられる。

本遺跡についてはこれまで浮線網状文、撫糸文が出土と紹介（増田1980、吉川1982）されて来たが、前述のように条痕文系の土器が主体を占め、ここに浮線網状文、条痕文と改めて述べておく。



第149図 繩文時代晚期～弥生時代中期遺跡分布図

縄文晚期～弥生中期遺跡一覧

1. 前庭遺跡 (浦和市) 安行Ⅲ・浮線網状文
2. 大間木内谷遺跡 ( ) 浮線網状文
3. 吉場遺跡 ( ) 浮線網状文
4. 馬場遺跡 ( ) 安行Ⅲ・大洞B-C~C
5. 白幡中校庭遺跡 ( ) 荒廻式住居2
6. 一ツ木遺跡 ( ) 安行Ⅲa
7. 馬場小室山遺跡 ( ) 安行Ⅲ住居・浮線網状文
8. 石神貝塚 (川口市) 安行Ⅲa~c・大洞B-C
9. 精神湯遺跡 ( ) 安行Ⅲb・大洞C
10. 小深作遺跡 (大宮市) 安行Ⅲa~c・住居1
11. 奈良瀬戸遺跡 ( ) 安行Ⅲc・住居2
12. 東北原遺跡 ( ) 安行Ⅲ・大洞C
13. 後谷遺跡 (桶川市) 安行Ⅲc・大洞C・前浦
14. 高井東遺跡 ( ) 安行Ⅲa・住居
15. 宮岡水川神社前遺跡 (北本市) 大洞A(?)
16. 打越遺跡 (富士見市) 大洞C~A'
17. 日高町高麗 (日高町) 千綱(?)
18. 花見堂遺跡 (嵐山町) 千綱
19. 屋田遺跡 (滑川村) 千綱
20. 四十坂遺跡 (阿部町) 墓
21. 上數免遺跡 (深谷市) "
22. 飯塚、飯塚南遺跡 (妻沼町) 墓、須和田住居
23. 三ヶ尻上古遺跡 (熊谷市) 墓
24. 池上、池上西遺跡 ( ) 須和田、環濠集落
25. 平戸遺跡 ( )
26. 橋戸遺跡 (花園町) 安行Ⅲa, b
27. 如来堂遺跡 (美里村) 大洞A~弥生初
28. 村後遺跡 ( ) 須和田住居
29. 前組羽根倉遺跡 (神川村) 須和田墓
30. 岩合遺跡 (秩父市) 岩陰、条痕文
31. 三角穴半洞窟遺跡 (猿野町) 条痕文
32. 大沼遺跡 (秩父市) 条痕文、中部系土器
33. 鶴田遺跡 ( ) 集落(?)
34. 下ノ原遺跡 ( ) 中期中葉
35. 花井遺跡 (横瀬村) 五貫森式
36. わらび沢遺跡 (吉田町) 变形工字文、羽状条痕文
37. 山田遺跡 (秩父市) 安行Ⅲ・住居3
38. 安中遺跡 (吉田町)
39. 発戸遺跡 (羽生市) 安行Ⅲc
40. 裏恵思寺遺跡 (岩槻市) 安行Ⅲc・大洞B-C
41. 真福寺遺跡 ( ) 安行住居
42. 田端前遺跡 ( ) 安行Ⅲb, c
43. 諏訪山遺跡 ( ) 方形周溝墓(?)
44. 南遺跡 ( ) 須和田住居
45. ささら遺跡 (蓮田市) 大洞A
46. 関山貝塚 ( ) 大洞A~A'
47. 入郷地遺跡 (白岡町) 安行Ⅲc・大洞B-C、千綱
48. 稲道川地区 (加須市) 大洞系(?)
49. 小塙遺跡 (葛浦町) 安行Ⅲa~c
50. 地獄田遺跡 ( ) 安行Ⅲa・住居4
51. 赤城遺跡 (川里村) 安行Ⅲa, b

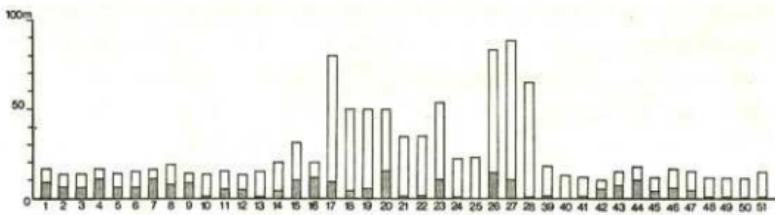


表1 遺跡の標高と沖積面との比高差(白ヌキとスクリーントーンを合わせた  
長さは標高を示し、スクリーントーンは沖積面との比高差を表す)

V類を中心とした条痕系の土器の類例としては杉田遺跡の粗製土器2群があげられ、杉田遺跡ではこれらの土器は杉田D類に伴うとしている。この共伴例は庄ノ畑遺跡（戸沢1953）で確認されており、両遺跡の中間地帯である本遺跡でも、浮線網状文に条痕文系の土器が主体的に伴う事実がとらえられたのである。V類の複合口縁の土器についても器形は千網式の特徴を具备しているにも関わらず、地文に捺糸文ではなく条痕文を施している。さらにV類の沈線も明瞭ではないが、あるいは稻妻形になる可能性も考えられ、条痕文系土器については杉田遺跡により近い様相を呈している。

この時期の遺跡は埼玉県でもその例は少なく、先述の花見堂遺跡の他10遺跡が確認されている程度であり、田部井の指摘どおり（田部井1980）分布は広いがその密度は小さい。又、遺構が検出される例が少なく、前後の時期ともつながらず、時期的に孤立しているという特徴的な共通点をもっている。このことは近県においても同様な傾向にあり、千網谷戸遺跡のように後期末から弥生初頭まで継続する例（伊東、増田1977他）は多くはない。

分布図（第149図）と表1は秩父地域を除いた安行Ⅲ期から須和田期までの遺跡分布と各遺跡の標高及び沖積面との比高差を示したものである。晩期終末の遺跡は吉川の指摘どおり沖積面ではなく、すべて台地上か丘陵上に位置している。これに対して安行Ⅲ期の地獄田遺跡（註1）や赤城遺跡（元井他1983）あるいは須和田期の池上遺跡（中島他1982）等の前後の時期には現在水田となっている地域に立地する場合がある。又、沖積面との比高差は多少地形にも影響されるが、終末期は5~10mと大きな差ではなく、他時期と比較して安定している。さらに、いずれも台地肩部あるいは甘粕山遺跡群のように丘陵の先端に位置し、加えて河川に面しており、台地奥部や小谷戸が複雑に入り組んだような地形にはない。このことは、低湿地や沖積地を指向しているのではなく、河川の有無を問題としているのであって、これまでにも再三述べられているごとく、漁撈を意識した集落占地であると考えることが可能である。

遺跡の分布は点在している程度であるが、その中では大宮台地に多く9ヶ所を数える。特に大宮台地南端の浦和周辺ではまとまっており、白幡中校庭遺跡（青木他1977）では荒海期の住居跡が調査され、該期の数少ない遺跡検出例となっている。その他には武藏野台地で1、比企丘陵で3、松久丘陵で1遺跡が確認されており、地図には載せていないが秩父地方でも数遺跡が知られている。

さて、本県における縄文時代終末期については、遺跡の調査例が増加しつつあるとは言え、増田が述べているとおり、その絶対数の少なさ、遺物量の少なさは否定できない。しかし、如来堂C遺

跡の調査によって四十坂遺跡出土土器と大洞A式併行期の間の一部を埋めることができ、縄文終末から弥生初頭にかけての問題について大きく前進したと言える。増田はこの如来CⅡ群土器を如来堂式として設定し、大洞A'式の新段階に位置付けており、この土器を弥生土器として扱っている。本遺跡との間には組成や文様についてもヒヤタスを感じるが、型的には1~2型式程の差しかないであろう。この間に凸帶を持つ壺や、水神平式系の条痕文土器を保有する集団が河川沿いに出現し、その分布は正にモザイク的でさえあるが、埼玉における弥生時代の幕引きを演じるのである。

(井上尚明)

## 註

- 1 萩浦町大字小林に所在する縄文時代後、晩期の遺跡。調査は昭和55年度に町教育委員会三ツ木貞夫氏により実施された。
- 2 群馬、長野、埼玉県の弥生時代研究者が1980年より年1回シンポジウムを開催しており、83年は群馬県の主催により、弥生初頭の土器について行われた。今年は長野県が当番県となって初期古墳を問題とする予定である。

## 引用・参考文献

- 青木義介 他「白幡中学校校庭内遺跡発掘調査報告」浦和市遺跡調査会報告第3集 1977  
青木義介 他「前庭遺跡発掘調査報告」浦和市遺跡調査会報告第4集 1977  
麻生優 他「打越遺跡」富士見市文化財調査報告第14集 富士見市教育委員会 1978  
磯崎正彦・上原甲子郎「亀ヶ岡式文化の外殻層における終末期の土器型式」『石器時代』第9号 1969  
伊藤晋祐・増田修「千網谷戸遺跡発掘調査報告(概報)」桐生市文化財調査報告 第2・3・4集 桐生市教育委員会 1977・1978・1980  
金井琢良一 他「花見堂」 崖山町教育委員会 1976  
後藤和民「原始集落研究の方法論序説」『駿台考古学論集1』 1975  
庄野靖寿 他「関山貝塚」埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第3集 埼玉県教育委員会 1974  
園田芳雄「桐生市千網谷戸遺跡調査報告」 桐生女子高等学校 1965  
園田芳雄「群馬県桐生市千網谷戸C-E S地点の調査」 両毛考古学会 1972  
杉原莊介・戸沢充則「神奈川県杉田遺跡および桂台遺跡の研究」『考古学集刊』2-1 1963  
田部井功「関東地方晩期縄文式土器の研究」『古代探叢』 早稲田大学出版部 1980  
中村五郎「畿内第I様式に並行する東日本の土器」1982  
永峯光一「氷遺跡の調査と研究」『石器時代』第9号 1969  
増田逸郎 他「甘粕山」埼玉県遺跡発掘調査報告書第30集 埼玉県教育委員会 1980  
馬目順一 他「一人子遺跡の研究」『南奥考古学研究叢書1』 1970  
元井茂 他「赤城遺跡」 川里村教育委員会 1983  
山内清男「所謂亀ヶ岡式土器の分布と擺設式土器の終末」『考古学』1-3 1990  
吉川国男 他「埼玉県土器集成4」 埼玉考古学会 1976  
吉川国男「西関東における弥生文化の波及について」『埼玉県史研究』第9号 1982  
『東日本における彌生中期の弥生土器』第4回埼玉・長野・群馬三県弥生時代シンポジウム資料 1983

(註2)

## 4 住居跡および古墳出土の土器について

### (1) 住居跡出土の土器について

住居跡出土の土器は、大要N群に分けられる。これらN群の土器を、以下、順を追って特徴的な土器を中心に説明し、位置づけたい。

#### 第I群土器

5住・19住に代表される土器群である。5住-1・2の土器は、土器説明では壺としているが大型の鉢の可能性がある。組成上、壺、台付甕の良好な資料を欠く。第I群土器に於いて、壺（小型丸底土器）を欠くことを積極的に評価し、壺が組成に加わる以前の土器群と考えたい。

5住-8は、謂所「欠山系」といわれる高杯である。口縁端部内側に面をもち、欠山式とされる高杯の手法の特徴をもつが、プロポーションは、かなり崩れている。

埼玉県内で類似品の出土例は、上尾市尾山台遺跡A-3-4住、同ささら遺跡8住出土のものがある。<sup>(注2)</sup>ささら遺跡出土のものは、屋田遺跡出土のものに形態的にも、手法的にもよく似ているが、口縁端部内側に面をもたない。

鉢は、5住において5点出土しており、出土頻度が高い。器面調整は比較的丁寧で内外面とも鏡磨きされている。口縁端部は丸くおさめている。器台とセットで使われていたものと思われる。19住-2の鉢は、外面に刷毛目を残し、口縁端部を丸くおさめる粗製品である。類似品は、上尾市馬込新屋敷遺跡14住にみられる。<sup>(注4)</sup>

台付甕は、良好な資料に恵まれないが、5住-5・6は脚台部が内湾気味に開くものである。19住-1は、口縁端部に木口状工具による刻目をもつものであるが、刻目の配列に規則性がなく、かなり乱れている。頸部の屈曲は、強く、内面に稜をもつ。

器台は、5住-10・11・12と3点みられる。10・11とも器受端部の作りがシャープである。脚部中位の屈曲は、10のはうが、やや強いが、形態的には類似している。10は、4孔を有し、いずれも大きめの孔をもち「東海系」とされる器台の特徴を具えていると言えよう。

現時点で該期にあてはまる土器を出土した遺跡は近隣地域に存在しないため、屋田遺跡5住と類似した高杯を出土した、ささら遺跡8住の遺物を検討してみたい。

ささら遺跡8住-1は、單口縁の壺で、口縁部、胴部とも粗い刷毛目の後、鏡磨きしたものである。頸部の収縮は強いが、頸部内面に稜をもたない。口縁端部は、平坦で、面取りをしている。

台付甕と思われる資料は、頸部の屈曲が弱く、口縁端部が平坦なもの、同じく頸部の屈曲が弱く口縁端部に棒状工具により刻目を加えたもの、頸部の屈曲が強く、「く」字状を呈すが、木口状工具で口縁端部に刻目を加えたものの3点が出土している。口縁端部を平坦に仕上げる手法は、所謂「前野町期」といわれる土器に共通する手法との指摘もある。<sup>(注5)</sup>8住-2は頸部は強く「く」字状に屈曲するが、口縁端部の刻目は弥生町期にみられる木口状工具によるものである。8住-4の口縁端部の刻目は、木口状工具やヘラ状工具ではなく、棒状工具によるもので、刻目としては新しい手法である。<sup>(注6)</sup>8住-6は、小さい口縁部をもつ小型壺と考えられる。このタイプの小型壺は浦和市西郷須黒神社遺跡、東京都板橋区前野町遺跡出土で提示された資料のうち出土地点不明の資料の中にあ

る。

以上のように、さらさら8住の土器は、一部形態的に新しいものも含むが逆に、弥生的形態や、手法をも含むものがあり新旧の形態、手法が混在している。同15住も同様な傾向がみられる。15住-3は、胴上部文様帶として単節羽状繩文と単節斜繩文を用い、ともにS字状結節文で区画しており、壺は下膨れを呈すが、台付壺は、いずれも刻目をもたない。

さらさら遺跡内で8住・15住よりも、後出と思われるものは、2住・21住出土土器である。台付壺については、口縁端部に刻目をもたず、頸部は、強く屈曲し、一部は球形化している。壺も頸部が強くくびれ、内面に稜をもち、球形化をとげている。器台も、前述の8号・21号に比べ、括弧が強く脚部の広がりも大きくなっている。これらの点から判断すると2住・21住は、五領期に含まれるものと考えられ、これに先行すると考えられる5住・8住は、所謂「前野町期」とされるものである。

富士見市南通り遺跡第3地点では、弥生町～五領期に亘る集落跡が発掘されている。そのうち屋田遺跡5住、さらさら遺跡8住に併行するものとして、109住・124住出土土器があげられる。これらは土器について簡単に述べると、台付壺は、頸部の屈曲が弱く、口縁端部に刻目をもたないものが多い。単口縁の壺も頸部の屈曲が弱く内面に稜をもたない。複合口縁の壺も存在するが、無文化している。しかし、この壺も頸部内面に稜をもたない。単節斜繩文とS字状結節文を胴上部にもつ壺も存在するが、胴部は、下膨れを呈さずやや長胴気味で、弥生町期には本来見られない形である。高杯は、杯部に稜をもち、脚は、「ハ」字に開く、器台は124住に器受部が、東松山市根平遺跡4住<sup>(註8)</sup>の器台に似たものがみられる。これらはいずれも從来前野町とされているものである。この南通り遺跡でも、109住・124住より後出と考えられるものに13住・15住・31住・136住出土のものがある。この段階のものは、台付壺の口縁に刻目をもたないものが多い。胴部は球形化し、頸部内面に稜をもつものもある。高杯は、口径が大きく、脚部も「ハ」字状に大きく開く。器台は、15住内だけで4タイプにも及び、同一住居内出土では、ヴァラエティーに豊んでいる。脚部の開きも「ハ」字に大きく開くものが多くみられる。31住では、異形器台形土器もみられる。これらは、いずれも五領期に帰属すべき土器と考えられる。

五領式土器の指標となった東松山市五領遺跡は、報告書が刊行されていないため、その実体は、詳しく述べられない。前野町遺跡出土のものと、五領遺跡出土のものと比較して、様式設定する考え方もある。五領遺跡の性格は、東松山周辺でも異質であり、布留系の壺や、鼓形器台等を出土する遺跡は、五領遺跡周辺に存在しない。本来このような特殊な遺跡は、標準遺跡として扱うべきではないが、五領式土器が設定された当時の研究水準からすれば、致し方無い所であろう。ここで問題となるのは、五領遺跡あるいは、従来、他の遺跡で五領期の特徴とされてきたものが、在地の土器にも、言及できるかどうかである。本来これらは周辺遺跡で検証すべきもので良好な資料がないためやや地域にまとまりがないが、さらさら遺跡、南通り遺跡第3地点、八王子市神谷原遺跡、板橋区成増一丁目遺跡の、台付壺の刻目の消失、壺・壺類の頸部「く」字屈曲、壺の無文化及び球形化<sup>(註10)</sup>は、五領期の土器形態として特徴づけられそうである。ここでは、とりあえず、定形化した壺（小型丸底形土器）を伴なわない一群の土器を五領期のうちでも最も古いものと考えたい。これらに該

当する土器は、さら遺跡2住・21住、富士見市南通り遺跡第3地点13住・15住・31住・136住、神谷原遺跡SB16・SB86・SB87、成増一丁目遺跡8住・10住であり、五領遺跡B区C-6住のものはこれらに近いが、やや後出的かもしれない。そして、これらより先出的と考えた屋田遺跡5住・19住と、これと併行関係にあると思われる前述のものは、從来、「前野町(式)期」とされているものである。前野町式土器は、提示された資料の一括性に対する疑義や齊一化を土師器成立とする立場から、その存在が問題とされて久しい。最近、前野町の存在を積極的に評価し新古の二段階に分けようとする論考もあるが、決して成功しているとは思えない。<sup>(註12)</sup> 波瀬浩氏らが言うように、<sup>(註13)</sup> 前野町期併行と思われる土器は「単体での抽出が困難」で、様式設定が難しい。現時点では、まして神谷原Ⅲで提示されたような新古の二段階編年は時期尚早である。むしろ、從来前野町期として考えられてきたものを弥生町式土器の中で最も新しい一群と考えた方が良く、弥生土器から土師器に移る土器変化がスムーズに理解できるようと思える。そして、所謂「前野町」とされ、筆者が、単なる弥生町期末の一段階と考える屋田遺跡第I群土器とそれに併行する土器群に先行するものは、八王子市鞍骨山遺跡9住に代表されるものと考えている。<sup>(註14)</sup>

## 第二群土器

2住・9住・10住に代表される土器群である。2住を除き、良好なセットに恵まれない。2住を中心簡単に述べてみたい。

2住の複合口縁壺は、無文化、球胴化は達成されている。頸部内面にも稜をもつ。台付壺は、いずれも頸部が強く括れ内面に稜をもつ。2つの壺は、球形に近い整った胴部をもつ。

器台は、タイプの違うものが2種類あるが、いずれも器受部が浅く、脚部は「ハ」字を開く。増は伴わない時期と考えている。これらに併行するものは、先述のように、さら遺跡2住・21住・南通り遺跡第3地点13住・15住・31住・136住、神谷原遺跡SB16・SB86・SB87、成増一丁目遺跡8住・10住と共に加え比企郡滑川村大谷遺跡5住である。<sup>(註15)</sup> いずれも定形化した壠は伴わず、五領期でも最古のもの(五領I式)と考えられる。

## 第三群土器

16住・20住出土のものである。いずれも壠を伴うもので、II群土器同様五領期に属するものであるが、やや後出的である。五領遺跡B区C-6住より新しく、B区46住とはほぼ同じくらいと考えられる。屋田遺跡18住は、柱状を呈す高杯がみられる。もしこの高杯を積極的に評価すれば、五領期の中でも最も新しいものとできるかもしれない。松浦有一郎氏の言う五領Ⅲ式に近いものである。<sup>(註16)</sup>しかし、この18住に関しては、出土土器の時期にバラツキがあることと、いずれも小破片ということで明確な位置づけは、保留したい。

## 第四群土器

屋田8住・17住に代表される土器群である。

8住の土器は、小破片が多い為、時期判定は難しい、1の壺は、おそらく胴部球形を呈すものと

思われる。地域は、異なるが、類例に本庄市古川端遺跡8住、児玉郡上里町愛宕遺跡7住があげられる。<sup>(注17)</sup> 5・6の高坏は、いずれも坏部に段をもつものである。口縁部は、僅かに外反気味に開くもので屋田4号墳第72図<sup>(注18)</sup>に似るものと考えられる。

17住出土品の中には、10の土器にみられるような平底の坏や、9の土器にみられるような和泉期でも新しい段階に出現する碗の系譜に連なると思われるものがある。6・7の高坏は、いずれも口縁部と坏部の境目に稜をもち、7は浅い。この傾向は、本庄市諏訪遺跡32住・49住、同西富田新田遺跡7住等を検討すれば、新しい要素と考えることもできる。<sup>(注19)</sup> 8住・17住とも良好な資料に恵まれない為、明確な位置づけは、難しいが、いずれにせよ和泉期の中でも、県北部ではカマドが出現している段階であり、新しい部類に含まれるものである。<sup>(注20)</sup> 8住・17住の前後関係もほぼ同一と考えられる。近隣の併行関係にある遺跡は、知らない。

## (2) 古墳出土の土器について

古墳出土の土器は、大要Ⅱ群に分けられる。様式としては、和泉～鬼高式土器に併行するものである。以下、順を追って、主要な古墳出土のものを中心に説明し位置づけたい。ただし、断らなければならぬのは、屋田遺跡周辺に、併行関係にある資料がほとんどない為、ある程度編年的研究が進んでいる、県北部の集落出土資料に頼らなければならないことである。<sup>(注21)</sup>

### 第V群土器

1号墳・4号墳に代表される土器群である。

4号墳出土のものは壺形土器に五領期に盛行する複合口縁を呈するものが3点みられる。

五領期に多数存在する二重口縁や複合口縁は、和泉期でも古い範疇に入るものには存在するようである。ただし、技法的、形態的にも二重口縁と複合口縁の分離が難しい。

4号墳—1・2・3の壺は、いずれも複合口縁を呈すが、複合部の表現が弱い。

高坏は、大きく2つのタイプに分けられる。11～17の高坏は、その類似例を周辺の地域では知らない。坏部の形状や柱状部から裾部に至る屈曲は、畿内の布留式土器併行期の高坏に似ているようにも思える。<sup>(注22)</sup> 18～21の高坏は、児玉郡児玉町後張遺跡60住の高坏に類似している。後張遺跡60住出土土器は、頭部の強く収縮する甕や大型の高坏をもち、坏、碗類をほとんど含まない古い様相をもつ傍ら變形土器の底部を欠いたような形状を呈す大型瓶をもつて、カマド出現直後の和泉期の土器相を呈しているようにも考えられる。

本庄市笠ヶ谷戸遺跡3住には、屋田4号墳出土高坏に近い形態をもつものがある。ただ僅かに裾部の形状の違いを指摘できるかもしれない。この3住からは「叩き目のある甕」が出土している点が注目される。実見していないので、笠削りの際のノッキングか「叩き目」か判断できないが、もし「叩き目」であるなら、須恵器製作工人、埴輪製作工人との人的、技術的交流の結果とも考えられる。また笠ヶ谷戸遺跡3住の組成中には、坏、碗類をほとんど含まない。壺は、口径が胴部最大径より大きく、丸底を呈す点で古い様相を呈すが「叩き目のある甕」の存在を考えると從来言われている五世紀中葉<sup>(注23)</sup>に近い時期の所産と考えられる。

屋田遺跡4号墳出土土器は、複合口縁壺をもつて、古く考えることも可能だが、和泉期の甕で

はやや時期が降る、胴部球形を呈すと考えられる壺、後張遺跡17住・笠ヶ谷戸3住に類似する高杯をもつて、和泉期でも最も古い様相をもつものでない。

屋田遺跡1号墳出土土器は、明確な壺の資料を欠く。1の壺は、下膨れを呈す点で、五領期の混入した土器と考へることもできる。高杯は4~5つのタイプが見られる。

小型壺は、14・15がみられるが、15のものは、底部が丸底化している。これは県北部に於いては、明らかにカマド出現以降にみられる特徴である。壺は、胴部全体が範削りされたもの、口径と胴部最大径が、ほぼ等しいもの、著しく胴部が偏平化したもの等が示すように新しい様相を呈す。

1号墳と4号墳では、大きな時間差は、なさそうであるが、1号墳の方が後出的要素を多く抽出できる。9号墳出土土器のうち、時期の判定できる資料は、ほとんどないが、2つの壺を観る限り、和泉期でもカマド出現以降のものである。

#### 第VI群土器

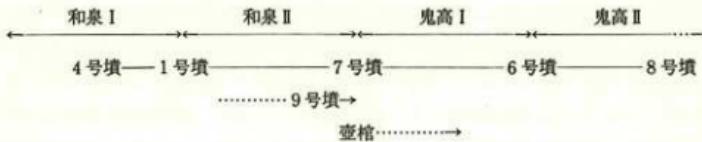
6号墳、7号墳出土のものである。いずれの古墳も良好な資料に恵まれない。

7号墳出土土器で時期を想定できるものは3の杯である。体部外面は、範削りの後ナデ消して器高も高く深い。内面には、暗文もみられる。このタイプの杯は、群馬県地方によくみられる杯である。時期としては、5世紀第4四半世紀~6世紀第1四半世紀に亘るもので、やや時間幅をもつが、屋田遺跡7号墳のものは、器形や器面調整技法からすれば、やや古く考えられそうである。

7号墳の周溝からは壺棺が出土している。この壺は、遺構からすれば、古墳より新しいもので、5世紀第4四半世紀以後である。この壺棺に類似した資料に、上尾市殿山古墳出土のものがあるが、この古墳は5世紀前葉とする位置づけがなされている。屋田遺跡7号墳のものも、殿山古墳出土のものも口縁部突帯のつけ方が近似している。鬼高期以降にみられる「有段の壺」と違い、和泉期の複合口縁壺にみられる形に近い。殿山古墳出土のものは、和泉期と考えられるにしても、7号墳出土のものは、時期的には、鬼高期段階であり理解に苦しむ。

6号墳出土の土器は、鬼高I期でも最も新しいものと考えている。実年代については、6世紀中葉でも、やや遡るものと考えられる。

8号墳出土のもので時期の判明するものは1の須恵器のみである。7世紀前葉の所産と考えた。屋田遺跡1号~9号墳の推移を示すと以下のようになる。



#### まとめ

屋田遺跡出土土器を整理して感じたことを若干の推測を交えて簡単に述べてみたい。

4号墳出土の壺は、いずれも複合口縁を呈すものであった。口縁部の表現は弱く、五領期にみら

れるものと異なるが、古い手法を残したものと言えよう。和泉期にも確かに複合口縁は、存在するが、先にも述べたように、二重口縁と複合口縁の中間的様相を呈するものである。このことは、畿内に於ける布留式土器の新しい段階の壺にも二重口縁を呈すものが存在するため背える。しかし、屋田遺跡4号墳出土のような複合口縁壺は、希れといえよう。このことは、殿山古墳出土の壺と屋田遺跡7号墳出土の壺棺の解釈から明らかである。屋田遺跡7号墳出土のものは、古墳より明らかに新しく、5世紀第4四半世紀以降のものである。もし、殿山古墳出土のものが5世紀前葉とされるならば、屋田遺跡7号墳出土のものは、かなり保守的な性格を帯びたものと言える。しかし、殿山古墳出土のものも土器から考慮すれば、5世紀前葉という位置づけよりも、5世紀前半という、やや幅をもたせた位置づけのほうが良いと思われるが、この点は再検討すべきであろう。もし古墳出土の土器に、このような保守的傾向が見受けられるなら、注意しなければならない。

次に屋田1号・4号墳出土の高杯にタイプの違うものが数種類みられる。このことは、どのように解釈すれば良いのであろうか。

熊谷市鎧塚古墳では、2次に亘る古墳祭祀が確認されている。そして、この祭祀で同時に用いられた土器は、器形の点で、かなり齊一性をもっている。屋田遺跡の場合、出土土器の位置が確認できないので、土器群としての一括性がない。そのため同時に供獻された土器を判明できない。この為それを知る手掛りは、土器の時期別細分しか方法があり得ない。そこで古墳出土の土器総数を参考にするなら次のことが言えるのではないかと考えている。(第1・2表参照)

屋田遺跡の古墳で最も土器を多く出土した古墳は、1号墳である(8号墳は7世紀前葉に位置づけられる。出土した土器のはほとんどは和泉期のもので、古墳には直接伴わない)。1号墳出土土器は、最大に見積もっても総数わずか141点である。このことは次のことを意味するものではなかろうか。

当時の土師器製作に専門工人集団があったとは考えられない。このため古墳供獻用の土器作り

第1表 古墳出土土器総数一覧表

	1号墳		4号墳		5号墳		6号墳		7号墳		8号墳		9号墳	
器種	総数	50%以上												
甕	19	1	40	6	33	1	12	2	25	1			32	1
壺	37	7	5	4	4		12	4	11	1			11	1
壇・小型壺	38	9	15		34		21		13	1			19	1
高杯	41	10	56	14	151	2	34		10	1			4	1
杯	1		1	1	1		1		1	1				
碗					1		2							
鉢	1	1	1	1			2		2					
瓶					6	1								
手捏ね	3				1	1	3	1	3	1			2	2
須恵器類	1										1			
計	141	28	118	26	231	5	107	6	65	6	1	0	68	6

に、集落から人が選ばれたことは、充分考えられる。しかも、作る土器の個体数も多くて、せいぜい141点程度であるため、1グループ数人で間に合うと思われる。そのため、器形や製作技法に関する規制は、かなり強いものではなかろうか。こう考えれば、屋田遺跡1号・4号墳のうち同一古墳から出土したタイプの違う高杯等は、全てがそうとは言えないまでも、機能・用途差と考えるよりも時間差を考えたほうがよさうである。事実、1号・4号墳出土のものを少なくとも2つに分類し、それぞれ2時期に分けることも可能である。またそれに加え、これらの古墳は単独埋葬よりも、複数埋葬の可能性が強い。

次に先述のことに関連して、第1・2表に提示した出土土器総数について述べてみたい。

和泉期の古墳出土土器総数が、1号墳141点、4号墳118点に比べ、鬼高窓の6号墳107点、7号墳65点、8号墳1点と相対的に減っている。集落出土のもので総数に触れたものを知らないが、筆者の経験からすれば、和泉期と鬼高窓では、出土数で差はないと思われるため、須恵器の出現や埴輪の樹立が古墳祭祀に何らかの影響を与える、数量が減少していったものと思われる。このように考へるなら、和泉期の9号墳は、和泉期の中でも最も新しいものと思われ、事実、9号墳出土の場合は、和泉期でも器面調整の点から最も新しいものとすることができる。

個々の器種の増減について触れるならば、高杯と小型壺ないし壺は、和泉期が多く、鬼高窓には減少してゆく。鉢は、鬼高窓にやや増加傾向を示し、壺ないし壺は、和泉・鬼高窓を通して数量は変わらない。高杯・小型壺・鉢は、集落の出土傾向と大差はないようである。

以上のことと加味して最後に付け加えるならば、屋田遺跡の古墳群は、各グループのうちで、最大規模をもつものは、須恵器を出土したり、石室を持ち、埴輪を樹立するなど、ある意味では先進的性格をもつが、小規模円墳は、旧態然として、土器のみを供獻するに留まっている。出土した土器も保守性をもったものが検出されている。このようなことから、この古墳群は総体的に保守的（後進的）要素を多分に含んだ古墳群といえよう。今後、古墳出土の土器に関しては、古墳出土土器に普遍的に保守性が看取できるならば、地域の特殊性、遺構、遺物等総合的な分析からの位置づけが重要となろう。このことは、五領期の古墳出土土器についても同様である。また集落出土の土器についても、地域の特殊性、遺構、遺物等の総合的分析による編年的研究が重要な課題となるであろう。

（立石盛詞）

## 註

註1 章だけは第I群土器を出土した住居跡、遺物を古墳時代のものとして扱っているが、第I群は、明らかに弥生時代末のものである。この点を誤解ないようにお願いするとともに、煩わしい不手際をお詫びしたい。

註2 「新編埼玉県史 資料編2」 埼玉県 1982

註3 藤原高志 大塚孝司「さら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第24集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1983

註4 註3と同じ。

註5 大村直 石川日出志 他「神谷原Ⅲ」 八王子市門田遺跡調査会 1982

- 註6 浦和市西郷に所在する遺跡である。現在、(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団で調査中である。
- 註7 杉原在介「東京都板橋区前野町遺跡の土器」 旁生式土器集成資料編2 1961
- 註8 小出輝雄「針ヶ谷遺跡群」 富士見市遺跡調査会調査報告第21集 富士見市遺跡調査会 1983
- 註9 水村孝行 今井宏「根平」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第27集 埼玉県教育委員会 1980
- 註10 鈴木敏弘 他「東京都板橋区成増一丁目遺跡発掘調査報告 本文編」 成増一丁目遺跡調査会 1981
- 註11 金井塙良一「シンボジウム 五領式土器について」 台地研究No.19 台地研究会 1971
- 註12 註5と同じ。
- 註13 滝沢浩 星龍象「赤塚水川神社北方遺跡」 1979
- 註14 岡田淳子 服部敬史「鞍骨山遺跡」 東京都八王子市谷野遺跡調査団 1971
- 註15 金井塙良一「大谷遺跡」 考古学資料刊行会 1973
- 註16 八幡一郎 松浦有一郎「外原」 船橋市教育委員会 1972
- 註17 柿沼幹夫 小久保徹「東谷・前山2号墳・古川端」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会 1978
- 註18 駒宮史郎 大和修「本郷東・愛后」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第7集
- 註19 柿沼幹夫 小久保徹「下田・諏訪」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会 1979
- 註20 『本庄市史 資料編』 本庄市史編集室 1975
- 註21 住居跡出土土器第1群との混同をさけるため、住居跡出土土器群の続き番号にした。
- 註22 増田逸郎 立石盛詞「後綴本文編I・図版編I」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
- 註23 「女塚遺跡調査概報」 本庄市教育委員会 1979
- 註24 1号墳から型的には、TK208型式に比定できる須恵器遺が出土している。胎土は、粗く白色粒子を含み、在地窯で焼かれているものと思われる。1号墳出土土器は、最低2度に亘る供獻が行われていると思われる。どの供獻に伴うかははっきりしないが、どの土器も時間的には接近していることから、1号墳が構築された時期には、須恵器が伴うものと考えられる。
- 註25 柳田敏司 赤石光賛「殿山古墳・殿山遺跡」 上尾市文化財調査報告書第6集 上尾市教育委員会 1979
- 註26 「新編埼玉県 史料編2」では、5世紀前葉という位置づけがされているが、註25の報告では5世紀前半とされている。
- 註27 寺社下博「鎧塚古墳」 熊谷市教育委員会 1981

第2表 古墳出土土器計数表

## 1号墳出土土器

器種	出土地点	部位名称	10%現存	20	30	40	50	60	70	80	90	100	計
甕	埴丘	口縁部 底 部	4 1	1 1	1(台付)					1(台付)			5 3
	周溝	口縁部 底 部	6		1(台付)								6 1
	不明	口縁部 底 部	2 ①				1(台付)						3 1
													19
壺	埴丘	口縁部 底 部	5	2	1	1						1	1 10
	周溝	口縁部 底 部	2 1	1 5	1	6			1			① 1	④ 16
	不明	口縁部 底 部	1 1	1		1					1	① 5	1 5
													37
埴ないし小型壺	埴丘	口縁部 底 部	2 1	1	1 ①					①		1	6 2
	周溝	口縁部 底 部	6 ① 3			1				1		1	7 6
	不明	口縁部 底 部	10	1		1		①			① ①	1 1 ①	13 4
													38
高杯	埴丘	口縁部 杯 部 柱状部 裾 部	1				1						0 0 1 1
	周溝	口縁部 杯 部 柱状部 裾 部	1 3 5	1 2	2 1			1		①	①	①	2 7 4 8
	不明	口縁部 杯 部 柱状部 裾 部	1 6	1 3		1					② 1	② ①	2 0 6 10
													41
杯	不明	口縁部		1									1
手捏ね	不明			3									3
鉢	不明	底 部							①				1
須恵器類	不明	胴 部			①								1

## 4号墳出土土器

器種	出土地点	部位名称	10%現存	20	30	40	50	60	70	80	90	100	計
甕	墳丘	口縁部 底部	22 6(1は合付)	3 ①	1(台付)			①	2				26 9
	周溝	口縁部 底部											0 0
	不明	口縁部 底部		①					①			2	2 3
				1									40
壺	墳丘	口縁部 底部						①		②			3 0
	周溝	口縁部 底部											0 0
	不明	口縁部 底部				①	①						0 2
													5
埴ないし小型壺	墳丘	口縁部 底部	6	2									8 0
	周溝	口縁部 底部											0 0
	不明	口縁部 底部	7										7 0
													15
高坏	墳丘	口縁部 坏部 柱状部 裾部	1	2		1			①			② ③	4 0 5 1
	周溝	口縁部 坏部 柱状部 裾部											0 0 0 0
	不明	口縁部 坏部 柱状部 裾部	15 4 2 2	2 4 1 2	3 1 ①	1 1		①		① ②	1 ①		18 14 9 5
							1						56
坏	墳丘	底部						①					1
鉢	不明	底部										①	1

## 5号墳出土土器(1)

器種	出土地点	部位名称	10%現存	20	30	40	50	60	70	80	90	100	計
甕	埴丘	口縁部 底 部	13	1	1		1						14 2
	周溝	口縁部 底 部	1	1									2 0
	石室	口縁部 底 部	2										2 0
	前底部	口縁部 底 部			1								0 1
	不明	口縁部 底 部	6	3									9 3
				2	1								33
壺	埴丘	口縁部 底 部		3									3 0
	周溝	口縁部 底 部											0 0
	前底部	口縁部 底 部		1									1 0
	不明	口縁部 底 部											0 0
													4
埴ないし小型壺	埴丘	口縁部 底 部	11			4							15 4
	周溝	口縁部 底 部	2										2 0
	不明	口縁部 底 部	9	1	2	1							13 0
													34
高杯	埴丘	口縁部 杯 部 柱状部 裾 部	16 7 7 24	2 1 3 2	2								18 10 10 27
	周溝	口縁部 杯 部 柱状部 裾 部	3 2 12		1								4 0 2 14
	前底部	口縁部 杯 部 柱状部 裾 部											0 0 0 5







## 9号墳出土土器(2)

器種	出土地点	部位名称	10%現存	20	30	40	50	60	70	80	90	100	計
壹	墳丘	口縁部 底 部											0 0
	周溝	口縁部 底 部	2	1 3	4								1 9
	不明	口縁部 底 部										①	0 1
													11
増ないし小型壹	墳丘	口縁部 底 部											0 0
	周溝	口縁部 底 部	11 1	3		2	1						14 4
	不明	口縁部 底 部 胴 部				①							0 0 1
													19
高 坏	墳丘	口縁部 坏 部 柱状部 褐 部											0 0 0 0
	周溝	口縁部 坏 部 柱状部 褐 部	2 1									1	2 1 1 0
	不明	口縁部 坏 部 柱状部 器 部											0 0 0 0
													4
手捏ね	周溝									①		①	2

註 ①(台付)は、台付甕である。

○で囲まれた数字は、報告書に掲載したものである。

報告書掲載のものは、現存率のもっとも良い部位の%の欄に記入した。

計測方法は、古墳に伴わない時期のものと胴部破片を除外し、部位の判明するものは、接合関係を確認した。

本表製作にあたり金井由美子・阿久津政徳・平島長生(東海大生)・福田聖(早稲田大生)の協力を得た。